【資料５】

厚真町古民家再生基本計画

平成 25 年 3 月

特定非営利活動法人　北の民家の会

明治期以降の北海道勇払郡厚真町における枠の内構法の農家建築の歴史的意義
－富山県砺波地方における枠の内構法の民家遺構との比較を通して－

A Study on the historical significance of the farm houses using wakunouchi construction method in Atsuma town, Yufutsu-gun, Hokkaido since the Meiji era
- A Comparative Study on the folk houses(Minka) using wakunouchi construction method in Tonami region, Toyama prefecture -

要旨

本研究は、北海道に残る農家建築の遺構を調査し、北海道で多くの遺構が確認された富山県砺波地方の枠の内構法の農家建築について、勇払郡厚真町を対象に実測調査を行い、建築的特徴を明らかにする。次に、入植者の出身地である富山県砺波地方の枠の内構法の農家建築との比較を通して、その関係性を検討して、勇払郡厚真町における枠の内構法の農家建築の歴史的意義を明らかにした。

北海道における枠の内構法以外の農家建築遺構は文献調査で、21 件確認された。建築年代は、江戸末期 1 件、明治期 14 件、大正期 3 件、昭和期 3 件で、地域は、空知 7 件、渡島 5 件、胆振 3 件、上川 2 件、檜山 2 件、石狩 1 件、十勝 1 件である。出身地は、宮城県 5 件、他は兵庫県、徳島県、福島県、香川県、岐阜県、山形県、青森県、新潟県が 1 件ずつある。

北海道における枠の内構法の農家建築遺構は、文献調査で 8 件確認された。建築年代は、明治 33 年(1990)頃から大正 15 年(1926)までで、明治期 3 件、大正期 5 件である。地域は、空知 5 件、十勝 2 件、石狩 1 件である。出身地は、8 件すべて富山県である。

厚真町に現存する農家建築は、飛谷家住宅(明治 37 年・富山県)、背戸川家住宅(明治 38 年・富山県)、幅田家住宅(明治 40 年代・富山県)、山崎家住宅(明治 44 年・富山県)、畑島家住宅(明治期・富山県)、森田家住宅(明治後期・富山県)、木沢家住宅(大正 2 年・富山県)、小路家住宅(大正初・石川県)の 8 件の農家建築が確認された。小路家住宅は石川県の民家形式の加賀Ⅰ型、背戸川家住宅は富山県出身であるが、石川県の民家形式の能登Ⅱ型に分類できる。他の 6 件は、富山県の民家の枠の内構法である。

厚真町における枠の内構法の農家建築は、明治 37 年(1904)から大正 2 年(1913)年までで、明治期は飛谷家住宅、幅田家住宅、山崎家住宅、畑島家住宅、森田家住宅の 5 件、大正期は木沢家住宅 1 件である。出身地は 6 件とも富山県である。

富山県砺波地方の枠の内構法の民家遺構は、江戸時代後期から大正 4 年(1915)までで、江戸期は富山市民俗資料館 1 件、明治期は旧根尾家住宅、入道家住宅、富山市民芸合掌館、旧金岡家住宅、富山市陶芸館 5 件、大正期は砺波散居村ミュージアム伝統館 1 件である。

明治期以降の北海道勇払郡厚真町における枠の内構法の農家建築を、富山県砺波地方における枠の内構法の民家遺構との比較をすると、厚真町は明治 37 年(1904)から大正 2 年(1913)、砺波地方は江戸時代後期から大正 4 年(1915)である。厚真町は広間Ⅲ型・C 型の茅葺か柾葺で、砺波地方で明治期に広間Ⅲ型・C 型がアズマダチに変わる前の形式である。厚真町は 60 坪以下で、砺波地方は 100 坪を超える。現在、砺波地方では厚真町の規模の農家は残っていない。広間の大きさは厚真町が 2 間×2 間半～3 間で、砺波地方の大きさに含まれ、農家全体の規模は小さい。砺波地方の農家の規模は大きいため、広間他にも枠の内の部屋があるが、厚真町の農家は規模が小さいため、広間の他に枠の内をもつ部屋はない。広間の梁組は厚真町が全てキ字型で、2 本の柱が支えている。砺波地方は 2 件が井桁で四隅の柱が支え、他はキ字型で 2 本の柱が支えている。広間の天井は厚真町の 6 件に板が張られ、砺波地方は 6 件に板が張られている。広間の小壁の貫は厚真町も砺波地方も 2 本が多く、帯戸は厚真町が 1 面、砺波地方が 2 面か 3 面であり、床は板

か畳が敷いてある。広間と玄関のつながりは、厚真町で 4 件、砺波地方で５件接している。

厚真町の枠の内は、富山県の民家の間取り形式・架構形式・屋根形式からみると、広間Ⅲ型・C 型で、切妻造・平入り、茅葺か柾葺である。砺波地方の枠の内は、江戸期には、広間Ⅱ型・A 型の寄棟造・平入りの茅葺で、嘉永 6 年(1853)頃から明治 4 年(1871)には、広間Ⅲ型・C 型の寄棟造か切妻造・平入りの茅葺に変わる。大正期に入ると、広間Ⅲ型・C 型のまま屋根がアズマダチに変わる。厚真町の枠の内は、砺波地方の枠の内の歴史的な変遷からみると、アズマダチに変わる前の形式である。

厚真町の枠の内構法の農家は、砺波地方の大正期にはみられなくなる形式で、砺波地方の枠の内構法の農家が大正期にアズマダチに変わる前の広間Ⅲ型・C 型で、茅葺か柾葺である。砺波地方の枠の内の農家は 100 坪を超えるが、厚真町の枠の内構法の農家は 60 坪以下で砺波地方より規模が小さい。厚真町の枠の内構法の広間の大きさは、2 間×2 間半～3 間で、砺波地方の枠の内構法の広間の大きさに含まれるが、厚真町の枠の内構法の農家は規模が小さいため、広間以外に枠の内をもつ部屋はみられない。厚真町の広間の梁組はすべてキ字型で直接柱が支え、砺波地方の広間の梁組では 2 件が井桁で四隅の柱が支え、その他はキ字型で直接柱が支えている。広間の天井、広間の小壁の貫、広間境の帯戸の仕様と広間と玄関のつながりには類似点がみられた。

明治期以降の北海道勇払郡厚真町における枠の内構法の農家建築の歴史的意義
－富山県砺波地方における枠の内構法の民家遺構との比較を通して－

目次

第１章　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ｐ．１
(1) 研究の背景と目的
(2) 研究の対象
(3) 研究の方法
(4) 本論文の構成

第２章　北海道における農家建築遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ｐ．８
(1) 北海道の農家建築遺構
(2)北海道における枠の内構法の農家建築
(3)小結

第３章　厚真町における枠の内構法の農家建築・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ｐ．２９
(1)厚真町に現存する農家建築
(2)厚真町における枠の内構法の農家建築の建築的特徴
(3)小結

第４章　富山県砺波地方の枠の内構法の民家遺構の歴史的変遷・・・・・・・・・・・ｐ．４２
(1)枠の内構法の民家遺構
(2)小結
(3)枠の内構法の民家遺構の歴史的変遷

第５章　厚真町における枠の内構法の農家遺構の歴史的意義・・・・・・・・・・・・ｐ．５８
(1)厚真町と富山県砺波地方における枠の内構法の民家遺構の比較
(2)厚真町と富山県砺波地方における枠の内構法の民家遺構の歴史的変遷

第６章　結論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ｐ．５９

注記

第１章　はじめに

(1) 研究の背景と目的

民家は、農家・町家・漁家など居住者の生業により様々な建築形式があり(注 1)、北海道においてもそれぞれの生活様式を物語る遺構が確認できる。民家は地域の文化財的価値だけでなく、地域資源や観光資源としても価値のある歴史的建造物である。勇払郡厚真町は(注 2)、北海道における農家建築の中で、北陸地方の富山県、石川県、福井県の民家の特徴をもつ越中型、加賀型、越前型の民家である農家建築が多く確認された(注 3)。

本研究は、北海道に残る農家建築の遺構を調査し、北海道で多くの遺構が確認された富山県砺波地方(注 4)の枠の内構法の農家建築について(注 5)、勇払郡厚真町を対象に実測調査を行い、建築的特徴を明らかにする。次に、入植者の出身地である富山県砺波地方の枠の内構法の農家建築との比較を通して、その関係性を検討して、勇払郡厚真町における枠の内構法の農家建築の歴史的意義を明らかにする。

1)枠の内と富山県の民家

富山県の農家の間取りは大きく5 つに分けることができる(図1-1)。1 つ目は、桁行をほぼ三分した中央部に表から裏まで梁間いっぱいに広間をとる間取りで、下手に土間を、上手にザシキ・ナンドの2 室をとる広間Ｉ型。2 つ目は、広間I 型の変形で、広間梁間が大きく、ここを棟通り近くで2 室に仕切る広間Ｉ－a 型。3 つ目は、広間が梁間いっぱいに広がらず、広間の後部に桁行をそろえてチャノマ・ダイドコロ・カッテ・タナマエなどと称する細長い部屋がつく広間Ｉ－b 型。4 つ目は、広間Ⅱ型で、広間後部にこれとほぼ同じ広さのチャノマを並べ、さらに土間側にダイドコロ・イロリ等と称する部屋をおく間取りで、規模の大きな場合はチャノマがつづいてその後部にリョウリノマをとるものがある。広間上手は表側からザシキ、ナカノマ(ナカザシキ)、ヘヤ部屋をとり、トコはザシキ妻側に設ける。トコと並んで仏壇を置くが、そうでない場合はナカノマの列の妻側に別のブツマをつくる。5つ目は広間Ⅲ型で、広間後部に広間とほぼ同じ広さのチャノマとその上手にこれより幅の狭いネマ、あるいはナカノマと称する部屋を並べてとる。このため広間とチャノマは食い違いを生じ、チャノマが一部土間側へ張り出す。またチャノマに続けて土間側にダイドコロを並べる。広間の上手にはごく規模の小さい家を除き、2 間のザシキを梁行に並べるのが一般的で、奥のザシキの突き当たりに表側を向けて、広間側に仏壇入、妻側にトコを構える。上手の妻側はザシキへ上がるための縁とす

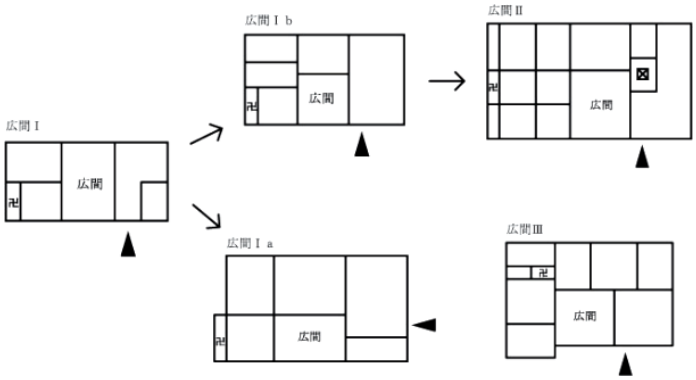


図 1－1 富山県民家の平面分類

る場合が多い県下の農家では広間・チャノマ・ニワナドニ竿縁天井など張らず、梁組をみせる構法がとられている。このうち最も特徴的なものが枠の内(ワクノウチ)と呼ばれる構法とチョウナ梁を用いた構法である 。

枠の内というのは、ヒロマ、ときにはチャノマに用いられ、室の4 面に太い柱をたて、指物でかため、太い梁を十字あるいは井桁に組み、その構造をそのまま見せる構法である。広間上部の架構はA、B、C、D の4 形式に分けられる(図1-2)。A 型は、梁間中央桁行にわたした牛梁に正面と背面の側桁上からこれに向かってチョウナ梁をなげかけ、この上に桁行きの梁を重ねて上屋梁をうけるとゆうものである。チョウナ梁の曲がりを利用して前後に幅3 尺程度の下屋を取り込む。B 型は、梁間ほぼ中央桁行に牛梁をわたし、チョウナ梁は広間前面側の柱筋に架けるというものである。この場合梁尻を上屋桁のすぐ下に架けた桁行きの梁にのせる場合と、差物上に立てた束に枘差あるいは天のりとする場合がある。B 型の構造をさらに強化したものにB′ 型がある。

図1-1 富山県民家の平面の分類

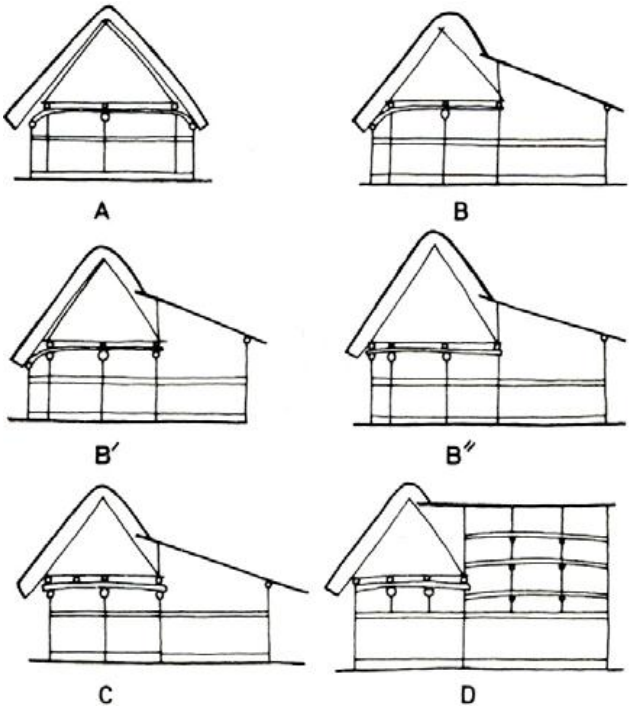


図 1－2 富山県民家の広間架構の分類

B′ 型では広間前面の上屋桁の下にチョウナ梁をはさむようにようにしてもう一本桁行の梁を入れ、構造の強化を図っている。こうなるとチョウナ梁の構造的な意味は少なくなる。C 型は、広間両側に3 本ずつの柱を配し、その中央の柱に桁行に太い牛梁を架け、これに梁行きの梁をかけるものである。普通は梁行きの梁が二列に架けられるので見上げがキ字型になる。また梁行の梁が一本で十字の梁組になるものや、まれに三列の梁を架ける例もある。D 型は、広間の四隅に柱がたち、これらを差物で固め、それぞれ柱間を三分する位置に束を建て、この束から束へ、まず桁行に二本、その上に梁行に二本の梁を架けわたすもので、見上げは井形になるような梁組である。このほかにB 型とC 型の中間的な梁組を持つものがある。これをB″ 型とする。この梁組は基本的にB′ 型と同じであるが、上屋梁は広間の前面の主筋までのびて、本来下屋であった前面の幅３尺の部分が上屋になっている形式である。こうなれば広間前方の梁は特にチョウナ梁を用いなくてもよいわけで、実際にこの形式のものではチョウナ梁を使用するものと、水平な梁を使用するものの両者がみられる。水平の梁を使用するものでは、広間前方にやや片寄ってはいるが、梁組の見上げは井字型となる。

2)北海道勇払郡厚真町と富山県砺波地方

北海道勇払郡厚真町(図 1-3)には北陸地方の出身の入植者が多いことが解っており、平成 21 年(2009)と平成 23 年(2011)に調査が行われている。その中にも、枠の内の構法が用いられ、建築当時の特徴を見ることが出来る枠の内をもつ住宅を実測調査の対象とした。次に、富山県(図 1-4)砺波地方(図 1-5)には入植者の出身地であり、枠の内の構法の住宅の遺構が残ってあることで現地調査の対象とした。

① 北海道勇払郡厚真町

厚真町は、苫小牧市に西南の一隅を接し、東は穂別町、南東に鵡川町がある。南は約 6 キロ太平洋に面し、北西は早来町、北は由仁町、夕張市に接する。稲作を中心とした純農村として 110 年の歴史を持つ。北海道南西部の道央圏に属する。本町の気候は、北海道気候区中、太平洋沿岸型気候に属し、一般に温和である。夏期は、南風が多湿の海岸地方で冷却され海岸地方一帯に濃霧をもたらす。この季節は気温が低下、肌寒さを感じる。奥地山間部ではその影響は少なく、大陸性気候型を示す。直接の台風は少なく被害も軽少である。秋から冬期にかけては雪をもたらす西風が太平洋岸のこの地に来るころには乾燥し、空っ風が多くなる。平均気温は、夏期に 25 度を超えることは少なく、冬期は-10 度以内である。また、降水量は年間を通して日本海側より少ないが、比較的多く、冬期は少ない。ほとんど積雪をみないで年を越すこともあり、道内で最も雪の少ない地域である(注 4)。

図 1－3 勇払郡広域地図

② 富山県砺波地方

富山県は、南北にのびる日本列島の中心、本州の中央北部に位置し、東は新潟県と長野県、南は岐阜県、西は石川県に隣接している。三方を急峻な山々にかこまれ、深い湾を抱くように平野が広がっており、富山市を中心に半径 50km というまとまりのよい地形が特徴である。また、日本海側の中央に位置する本県では、アジア大陸や朝鮮半島など対岸諸国との古くからの交流の積み重ねを活かし、環日本海地域の中央拠点として活発な取組みを展開している。

図 1－4 日本の中の富山県の位置

10 市 4 町 1 村からなる富山県の 15 市町村中の砺波市は、面積 126.96 平方キロメートル、東西延長　14.3 キロ、南北延長　16.2 キロ、最高標高 987 メートル（牛嶽山頂）である。庄川の流域に開けた扇状地、砺波平野。名水が潤す豊穣の大地は強靭な増山杉、黄金色の稲穂、色鮮やかなチューリップを育み、日本の原風景を彷彿とさせてくれる。また、カイニョと呼ばれる屋敷林の中、切妻屋根アズマダチの農家が、碁石を散りば

めたように点在する散居村は春から夏は萌える緑、秋は黄金、そして冬は銀白のじゅうたんと四季折々、美しい田園風景を見せてくれる。

③　砺波平野の散村(散居村)

砺波平野は富山県の西部に位置します。砺波平野を回りの山から眺めると、一面に碁石をまきちらしているように農家が散在している。各農家は東向きで、カイニョと呼ばれる屋敷林に囲まれ、100mから 200mずつ離れて建っている。このような景観を散村(散居村)という(写真 1－1)。全国では出雲(島根県)の樋川平野(斐川町)・静岡県の大井川扇状地(大井川町)・岩手県の胆沢平野(奥州市)・北海道の十勝平野などで見られ、県内でも黒部川や常願寺川・神通川などの扇状地の一部にみられますが、広さにおいても散居の仕方においても砺波平野が最も典型的である。

図 1－5 富山県の中の砺波市の位置

写真 1- 1 砺波地方散居村の景観

砺波平野は主に圧川が作った扇状地である。圧川の流れが固定していなかったために、扇頂部から扇央部にかけての開発は、平野周辺の山麓地帯や扇端部より遅れた。早くから開けたところもあるが、趨勢としては中期末から開かれはじめ、特に戦国の争乱が治まった近世初頭には、用水も警備され急激に開発が進んだ。散村はこの程度で広がり、開発が終わる江戸時代末には平野全体を埋つくす。まず、微高地の耕土の厚いところを選んで住居を定め、その周りを開いていった様子が史料からうかがえる。その場合、水の豊かな扇状地のためどこでも容易に水を引くことができた。耕地が家のまわりにあることは、営農上も都合がよかったので、この形態が長く持続され、今日に至っている。(注 6)

(2)研究の対象

1)北海道における農家建築遺構

1．北海道の農家建築遺構

①　久末家住宅：江戸末期ごろ、檜山・上ノ国

②　旧岩間農家住宅：明治 15 年(1882)、石狩・札幌市

③　近江家住宅：明治 17 年(1884)、渡島・赤川町

④　旧三戸部家住宅：明治 10 年代後半、胆振・伊達市

⑤　泉記念館：明治 20 年(1887)、空知・栗山町

⑥　迎賓館：明治 25 年(1892)、胆振・伊達市
⑦　加藤家：明治 27 年(1984)、胆振・伊達町
⑧　永池家住宅：明治 29 年(1896)、空知・栗山町
⑨　旧桜井家住宅：明治 20 年代、空知・美唄市
⑩　雨竜町開拓記念館：明治 33 年(1900)以前、空知・雨竜町
⑪　友成家住宅：明治 36 年(1903)、空知・浦臼町
⑫　滝野庵：明治 39 年(1906)、檜山・厚沢部町
⑬　旧松浦家住宅（養蚕民家）：明治 42 年(1909)、上川・旭川市
⑭　明治の家：明治 44 年(1911)、上川・東川町
⑮　石田家住宅：明治期、空知・夕張市
⑯　美濃の家：大正 5 年(1916)頃、十勝・士幌町
⑰　国兼家住宅：大正 6 年(1917)、空知・岩見沢市
⑱　菊谷家住宅：大正 13 年(1924)、渡島・神山
⑲　ハ戸家住宅：昭和 2 年(1927)、渡島・湯川町
⑳　藤田家住宅：昭和 3 年(1928)、渡島・七飯町
㉑　中村家住宅：昭和、渡島・知内町

参考文献

・北海道の近代和風建築 - 近代和風建築総合調査報告書 - 、北海道教育委員会、2007.3
・日本建築学会：日本の建築　第 1 巻/北海道・東北、新建築社、1986.10
・日本の民家 調査報告書集成 1 北海道・東北の民家 北海道・青森・秋田 東洋書林 1998.9
・角幸博：函館の建築探訪、北海道新聞社、1997.9
・角幸博：旭川と道北の建築探訪、北海道新聞社、2000.11
・角幸博：道南・道央の建築探訪、北海道新聞社、2004.11
・角幸博：道東の建築探訪、北海道新聞社、2007.5

2. 北海道における枠の内構法の農家建築

①　旧樋口家住宅：明治 33 年(1990)頃、石狩・札幌市
②　宮森家住宅：明治 35 年(1902)、　空知・栗沢町
③　田守家住宅：　明治 38 年(1905)、十勝・帯広市
④　西村家住宅：大正元(1912)年、空知・芦別市
⑤　中札内村開拓記念館：　大正 8(1919)年、十勝・中札内町
⑥　黒島家住宅：　大正 9 年(1920)、　空知・芦別市
⑦　川鳥家住宅：大正 15 年(1926)、空知・芦別市
⑧　末永家住宅：大正 15 年(1926)、空知・芦別市

参考文献

・飯島沙織：北海道における明治後期以降の「越中造」民家の史的研究、札幌市立大学デザイン学部卒業研究、2010.3

・北海道の近代和風建築 - 近代和風建築総合調査報告書 - 、北海道教育委員会、2007.3
・日本建築学会：日本の建築　第1巻/北海道・東北、新建築社、1986.10
・角幸博：函館の建築探訪、北海道新聞社、1997.9
・角幸博：旭川と道北の建築探訪、北海道新聞社、2000.11
・角幸博：道南・道央の建築探訪、北海道新聞社、2004.11
・角幸博：道東の建築探訪、北海道新聞社、2007.5

2)厚真町における枠の内構法の農家建築

①　飛谷家住宅：明治37年(1904)、厚真町本郷
②　背戸川家住宅：明治38年(1905)、厚真町朝日
③　幅田家住宅：明治40年代、厚真町朝日
④　山崎家住宅：明治44年(1911)、厚真町東和
⑤　畑島家住宅：明治期、厚真町朝日
⑥　森田家住宅：明治後期、厚真町宇隆
⑦　木沢家住宅：大正2年(1913)、厚真町軽舞
⑧　小路家住宅：大正初め、厚真町高丘

参考文献

・澤田香南子：北海道勇払郡厚真町における農家建築の建築的特徴、札幌市立大学デザイン学部卒業研究、2010.3
・大多智絵：北海道勇払郡厚真町における枠の内をもつ農家建築の特徴、札幌市立大学デザイン学部卒業研究、2012.3

3) 富山県砺波地方の枠の内構法の民家遺構の歴史的変遷

①　富山市民俗資料館：江戸時代後期、富山市安養坊56番地－1
②　入道家住宅：嘉永6年(1853)、砺波市太田
③　富山市民芸合掌館：文久2年(1862)、富山市安養坊56番地－1
④　旧金岡家住宅：明治4年(1871)、富山県砺波市豊町1丁目2－10
⑤　旧根尾家住宅：明治14年(1881)、福井県あわら市吉崎一丁目902番地1
⑥　富山市陶芸館：明治27年(1885)、富山市安養坊56番地－1
⑦　となみ散居村ミュージアム伝統館：大正4年(1915)、富山県砺波市太郎丸80番地

参考文献

・富山市民俗資料館　富山市民俗民芸村　パンフレット
・入道家住宅　平成10年2月25日　富山県指定有形文化財　富山県教育委員会。
・富山市民芸合掌館　富山市民俗民芸村　パンフレット
・砺波指定文化財　旧金岡家住宅　かいにょ苑　パンフレット
・永井規男・福井宇洋：吉崎御坊蓮如人記念館七不思議堂(旧根尾家住宅)、調査報告書、2011.10
・富山市陶芸館　富山市民俗民芸村　パンフレット

・となみ散居村ミュージアム、砺波の伝統的家屋　アズマダチ　パネル

(3)研究の方法

北海道においてすでに調査されている農家建築遺構について建築的特徴を文献調査で行い、次は、厚真町において行った事前調査の実測調査の結果を述べ、その中で枠の内構法の農家建築の建築的特徴を明らかにする。砺波地方においては、北陸の現地調査を行い枠の内構法の民家遺構の建築的特徴を明らかにし、枠の内構法の民家遺構の歴史的変遷について述べる。また、既に研究されている厚真町と砺波地方の枠の内を基に住宅の建築的特徴について比較し、厚真町と砺波地方における枠の内構法の民家遺構の歴史的変遷について述べ、比較し得られた歴史的変遷を明らかにする。

(4)本論文の構成

第1章では、本研究の背景と目的、研究の方法、研究の対象地である厚真町の地勢や気候、調査対象民家のある地区について説明し、富山県砺波市の地形や地勢、調査対象枠の内構法の民家遺構のある砺波平野の散村について説明する。第2章では、北海道においてすでに調査されている農家建築遺構について建築的特徴を述べる。第3章では、厚真町において行った事前調査の実測調査の結果を述べ、その中で枠の内構法の農家建築の建築的特徴を明らかにする。第4 章では、砺波地方において行った現地調査の枠の内構法の民家遺構の建築的特徴を明らかにし、枠の内構法の民家遺構の歴史的変遷について述べる。第5 章では、3章と4章で行った厚真町と砺波地方の住宅の建築的特徴について比較し、厚真町と砺波地方における枠の内構法の民家遺構の歴史的変遷について述べる。第6章では、5章で比較し得られた歴史的変遷から結果を述べる。

第２章　北海道における農家建築遺構

(1)北海道の農家建築

北海道における枠の内構法以外の農家建築遺構は文献調査で、21 件確認された。

①久末家住宅

所在地　檜山・上ノ国

建築年代　江戸末ごろ

構造　木造

屋根形式　寄棟造・平入り/茅葺

文化財指定　町指定文化財

写真 2-(1)-1　外観、内部

久末家住宅(注 7)は、江戸末ごろに建てられ、寄棟造の平入りで、茅葺の農家建築である。町指定文化財に登録されている。

②旧岩間農家住宅

所在地　石狩・札幌市

建築年代　明治 15 年(1882)

構造・規模　木造平家・142 ㎡

屋根形式　切妻(石置き)造・平入り/板葺

旧岩間農家住宅(注 8)は、旧仙台藩亘理領からの士族移住者の住宅で入植後 2 回目の家屋にあたる。間取り、土塗り壁、5 重に重ねた小屋梁組など出身地の形式を示している。明治 15 年(1882)に建てられ、切妻(石置き)造の平入りの板葺である。

写真 2-(1)- 2　外観、内部

③近江家住宅

所在地　渡島・赤川町

建築年代　明治 17 年(1884)

構造　木造平家

屋根形式　寄棟造・平入り/茅葺

写真 2-(1)- 3　外観

近江家住宅(注 9)は、明治 17 年(1884)に建てられ、寄棟造の平入りで、茅葺である。空間構成には間取りは広間型系の喰い違い四間取りで、入口土間奥に居間・台所を設け、土間手前に雇い人の部屋があった。家族の日常生活は居間で行われたが、客の対応には茶の間が使用された。茶の間は現在 2 部屋に別れており、茶の間奥の小部屋は寝室に使用され、縁側と続いている。座敷は続き間になっており、手前表側が仏間、裏側の座敷には棚・床・書院を構え縁側が接している。近江八景が描かれ

たふすまや、窓のガラス、仏間など名家らしい格式を示しており、朱塗りの神棚は、装飾用の金具の取付以外は釘を使用せず、手の込んだ造りとなっている。

④旧三戸部家住宅

住所地　胆振・伊達市

建築年代　明治 10 年代後半

移築年代　昭和 44 年(1969)

屋根形式　寄棟造・平入り/茅葺

文化財指定　重要文化財

旧三戸部家住宅(注 10)は、旧亘理藩士移住者の家屋で、現在伊達市の史跡である開拓記念館庭園内にある。明治 10 年代後半に建てられ、代表的な移住当時の民家で、昭和 44 年(1969)に移設、復原したものである。寄棟造、茅葺屋根、外壁荒壁、釘を使わず組み立てる仙台地方の建築様式で建てられて代表的な移住当初の民家でもある。間口五間、奥行三間半の平面は、向って左がイタと呼ばれる部屋、右前面がオクザ、後方がナンドである。イタの前面を切込んで幅二間、奥行三尺の土間を設け、引分け板戸で外部へ出入する。また、イタの中央に、イロリを切っている。

写真 2-(1)- 4　外観、内部

⑤泉記念館

所在地　空知・栗山町

建築年代　明治 20 年(1887)

所有者　泉　勝文

構造・規模　木造・125 ㎡

屋根形式　寄棟造・平入り/わら葺き

泉記念館(注 11)は、宮城県角田藩の出身で、明治 20 年(1887)に栗山町角田部藩の開拓指導者泉麟太郎の建てた住宅である。寄棟造の平入りで、わら葺きである。軒先は、正面および両妻側が化粧軒天井、軸部は真壁、外部の小壁は土壁、腰は押縁下見板張りとなっている。平面は(図 2-(1)-1)、正面左よりの間口二間の玄関のつき当たりが、板張りの大きい茶の間、その右側に二十畳の座敷が二室、またその左側に、六畳の子供室、

写真 2-(1)- 5　外観、内部

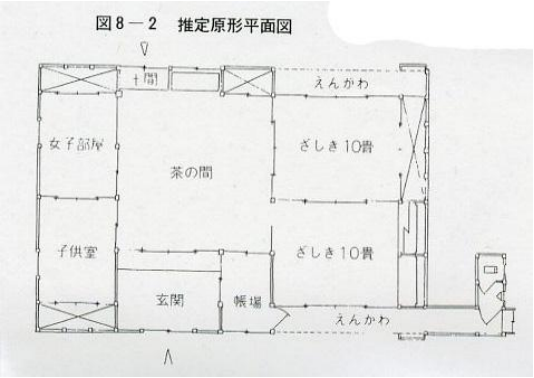


図 2- (1)-1　平面図

女子室があり、玄関の右が三畳の張場という構成である。

⑥迎賓館

所在地　胆振・伊達市

建築年代　明治 25 年(1892)/移築年代　昭和 44 年(1969)

構造　木造 2 階建

屋根形式　入母屋・平入り/柾葺→金属板葺

文化財指定　伊達市指定有形文化財

迎賓館(注 12)は、明治 25 年(1892)に建てられ、入母室の平入りで、柾葺から金属板葺になった住宅である。明治時代の北海道開拓農家の数少ない遺構で、昭和 44 年(1969)に現在地に移築された。伊達市の歴史は、仙台藩一門亘理伊達邦成が家臣 250 人とともに、明治 3 年(1870)に入植したことに始まる。明治政府はこの開拓を評価し、一度は剥奪した士族籍を復籍。邦成は開拓功労により男爵となり、その基本財産としてこの迎賓館を建設した。建物は在来の和風建築に比べ背が高く、1 階玄関脇左手の出窓のある部屋だけが洋間です。

写真 2-(1)-6　外観

写真 2-(1)-7　内部

⑦加藤家

所在地　胆振・伊達町

建築年代　明治 27 年(1984)

所有者　加藤　一夫

構造・規模　木造一階・90 ㎡

屋根形式　寄棟造・平入り/柾葺

加藤家(注 13)は、明治 27 年(1984)に旧亘理藩士移住者の家屋の一つで、亘理在住当時の建物と同様に作ったと言い伝えている建物である。大工は、山形県出身者で、明治 19 年(1886)から同町に移住の西村銀太郎である。寄棟造の平入りで、柾葺である。平面は、向って右に板の間のダイドコがあり、その左に四間取りの前面右からナガザシキ八畳、オクザシキ八畳、後部に右からウラザ八畳、ナンド七・五量と並ぶ。オクザシキには、各一間幅の床と床脇とがあり、また、ナガザシキの前面には、板の間の二間幅、三尺奥行のナカノクチが設けられ、またこれと並ぶダイドコロ前面に、同じ二間幅の板の間のエンガワがある。さらにウラザには、ナンドの一部に突出した三尺角の仏壇が設けられている。オ

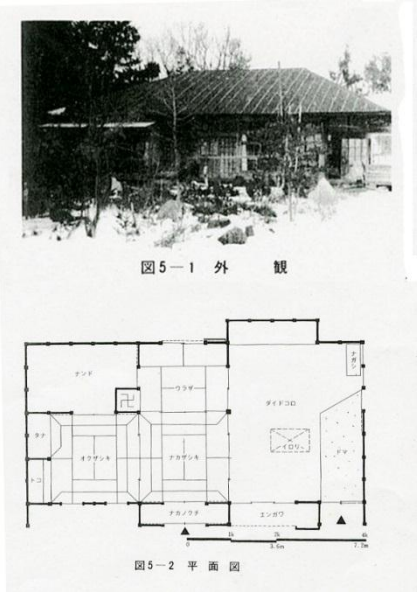


写真 2-(1)-8　外観、平面図

クザシキ、ナかザシキ、ウラザは、量敷き、納戸は、板敷きである。また、ダイドコロの右はじは、土間となっており、土間の後方には、二間幅の下屋の突出がある。

⑧永池家住宅

所在地　空知・栗山町

建築年代　明治 29 年(1896)

構造　木造

屋根形式　切妻造・平入り/柾葺

永池家住宅(注 14)は、明治 29 年(1896)に建てられ、切妻造の平入りで、柾葺の農家建築である。

写真 2-(1)-9　外観、玄関部

⑨旧桜井家住宅

所在地　空知・美唄市

建築年代　明治 20 年代

移築年代　昭和 8 年(1993)

構造　木造平屋 2 階建

屋根形式　切妻造・平入り/柾葺

文化財指定　市指定文化財

旧桜井家住宅(注 15)は、美唄市の市街地に位置し、敷地の東は国道 12 号に接する。明治 24 年(1891)、当地(旧屯田騎兵隊給与地第 7 番)に桜井良三が兵庫県から移住し、良三と息子・省吾の二代にわたる自邸が建てられた。切妻造の平入りで、柾葺である。本住宅と敷地は昭和 58 年(1983)、桜井家から美唄市へ寄贈され、住宅は平成 4 年(1992)に美唄市指定文化財になっている。

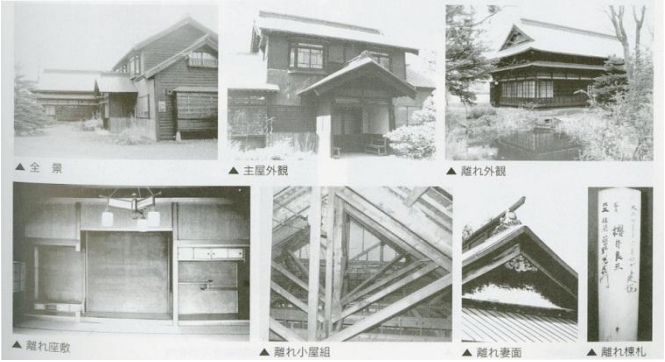


写真 2-(1)-10　外観、内部、小屋造

建物の構成は北から主屋、四間取りの居室棟、離れからなり、主屋と離れにはそれぞれ棟札がある。全体は和風を旨とするが、2 階正面に相称な配置で出窓を設けて洋風要素も加えられている。内部は、東西に 3 つの座敷が並び、東の十八畳が主座敷で床、付書院を設けている。小屋組はキングポスト・トラスを採用し、和風の住宅に洋風小屋組を用いている。

⑩雨竜町開拓記念館

所在地　空知・雨竜町

建築年代　明治 33 年(1900)以前

構造　木造

屋根形式　寄棟造・平入り/柾葺

雨竜町開拓記念館(注 16)は、明治 33 年(1900)に建てられ、寄棟造の平入りで、柾葺の農家建築である。

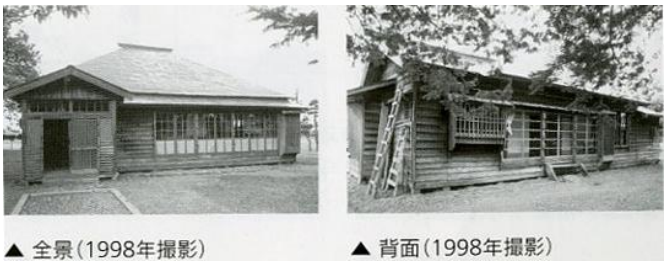


写真 2-(1)-11　外観

⑪友成家住宅

所在地　空知・浦臼町

建築年代　明治 36 年(1903)

構造　木造平家建

屋根形式 切妻造・/柾葺

初代友成士寿太郎は、徳島県那賀郡宮倉村から明治 24 年(1891)に入植して友成農場を創設し、以降代々町政に貢献してきた。友成家住宅(注 17)は、明治 36 年(1903)に建てられ、切妻造の柾葺の農家建築である。平面は梁行 5 間、桁行 8 間で、主玄関は四間取りのオモテ側シモテの 8 畳間に設けられている。オモテ側の 8 畳 2 室とウラ側の 8 畳間の 2 室は続き間であるが、オモテ側とウラ側の各 8 畳の間は押入などで仕切られている。オモテ側シモテの 8 畳間は 1 間の押入とウラ側への出入口、オモテ側カミテの 8 畳間は床・違棚の座敷飾り、ウラ側カミテの 8 畳間は 2 間の押入、ウラ側シモテの 8 畳間は 1 間の押入・仏壇とオモテ側への出入口をそれぞれ設けている。意匠上の特徴としては、基礎・屋根材・土間部分に改修がみられるが、当初の姿を良く残している。切妻平入りにつく入母室屋根の主玄関、3 面に回る下室は廊下の屋根にあたり、下玄関部分では庇となっている。神棚、仏壇、床・違棚の座敷飾りは、意匠的にも優れている。

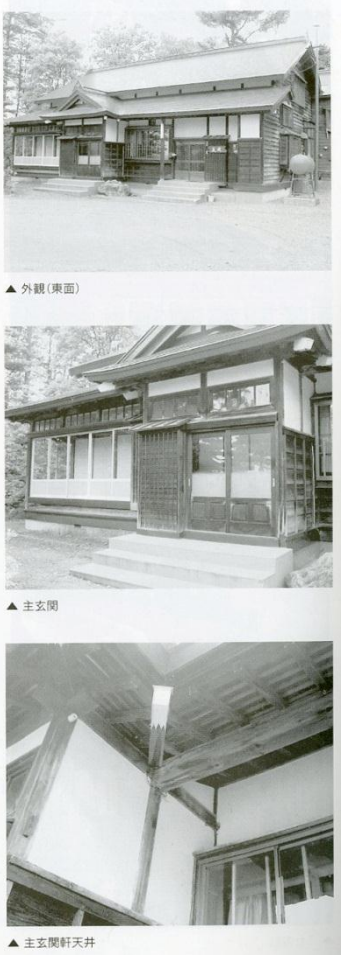


写真 2-(1)-12　外観

⑫滝野庵

所在地　檜山・厚沢部町

建築年代　明治 39 年(1906)

屋根形式　寄棟造・平入り/茅葺

滝野庵(注 18)は、明治 39 年(1906)に建てられ、寄棟造の平入りで、茅葺の農家建築である。

写真 2-(1)-13　外観

⑬旧松浦家住宅

所在地　上川・旭川市

建築年代　明治 42 年(1909)

屋根形式　切妻(甲)造・平入り/茅葺

写真 2-(1)- 14　外観

東旭川町は開墾前から野生の桑が多く生息し、養蚕に適していました。明治 34 年(1901) 頃から、養蚕が盛んであった福島県大田村周辺から団体入植が行われ、副業として大きく発展した。最盛期の大正 8 年(1919)には、310 戸に及びました。旧松浦家住宅(注 19)は、現存唯一のもので、郷里福島の養蚕民家を模範に明治 42 年(1909)に建てられた。茅葺の屋根は「片あずま」と呼ばれる大胆なデザインで、寄棟屋根の一部を切り落とし、そこに開口部を設けている。

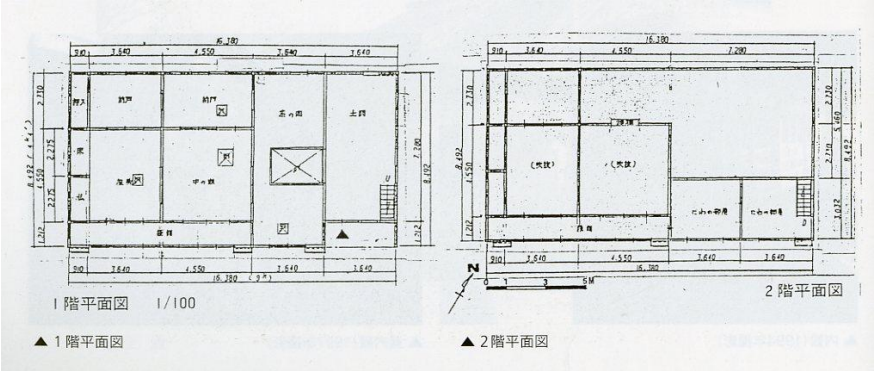


図 2-(1)- 2　平面図

⑭明治の家

所在地　上川・東川町

建築年代　明治 44 年(1911)

移築年代　昭和 62 年(1987)

構造　木造平家　一部中２階健

屋根形式　切妻造・桟瓦葺

文化財指定　東川町指定文化財

施工者　細川　久作

写真 2-(1)- 15　外観

明治の家(注 20)は、明治 28 年(1895)に香川県から入植した農家、尾田松造家の住居であり、明治 44 年(1911)に東川町農家住宅として建築したもの。昭和 62 年(1987)に現在地に移築復元された。田の字型に土間が付く、典型的な農家住宅形式をもつ。屋根は当初かわら葺きであったが、トタン葺きを経て、現在は桟瓦葺きとなっている。

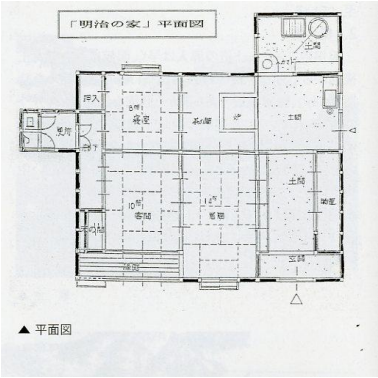


図 2- (1)-3　平面図

⑮石田家住宅

所在地　空知・栗山町

建築年代　明治後期

構造　木造

屋根形式　入母屋/瓦葺

石田家住宅(注 21)は明治後期に建てられ、入母室の瓦葺きの農家建築である。

写真 2- (1)-16　外観

⑯美濃の家

所在地　十勝・士幌町

建築年代　大正 5 年(1916)頃

移築年代　昭和 63 年(1988)

構造　木造平家

屋根形式　切妻造・平入り/柾葺

施工者　松井　喜市(大工)

写真 2- (1)-17　外観

士幌町の歴史は、明治 31(1898)年の美濃開墾合資会社による中士幌地区への入植から始まり、この住宅の主であった洞田増次郎も小作人としてこの一団と共に入地している。美濃の家(注 22)は、

大正 5 年(1916)頃建てられ、切妻造の平入りで、柾葺の農家建築である。同地区在住の大工が一人で手がけたといわれ、西上音更産の材を使用しているが、大きな土間に四間取りの間取りなど、故郷・美濃地方の農家住宅の特徴が踏襲されている。遺族からの寄贈申し出を受けて本建物は、昭和 63(1988)年の町開拓 90 周年記念事業の一環として、紂士幌幹線 64 から現在地へ移築され、現在も「開拓史跡」として保存されている。

⑰国兼家住宅

所在地　空知・岩見沢市

建築年代　大正 6 年(1917)

構造　木造

屋根形式　寄棟造/柾葺

国兼家住宅(注 23)は、山形県鶴岡市出身の竹野繁次郎の住宅として大正 6 年(1917)に建てられ、昭和 14(1939)年に国兼氏に譲渡され、その後昭和 30 年(1955)に東側にあった台所・湯殿と文庫蔵、西側にあった 4 間取りの 8 畳間の 2 間が削られ、規模を縮小する改築が行われた。

平面構成は(図 2-(1)-4)敷地北側にある道路に面して、玄関・取次ぎ(3 畳)・4 畳半間・脇玄関が並び、その奥に 10 畳間・7 畳半間。その奥には庭園対して南面する土縁に接して座敷(8 畳)・次の間(6 畳)が並ぶ、喰い違い四間取りの平面である。西側には、応接間と台所(15 畳)・4 畳半間・風呂・勝手口がある。意匠上の特徴では、北側立面は、寄棟の主屋根の西側に切妻の張出しが付き、起りのある入母室屋根の玄関がほぼ中央に位置している。外壁は土壁の上に下見板張りで、白漆喰の小壁をもつ。南側にある庭園には邸内社が据えられている。座敷は床・違棚・付書院の座敷飾りをもち、座敷廻りの欄間には刀の鍔 24 枚を散らした意匠である(うち 12 枚は江戸時代のもので岩見沢市文化財指定)。ほとんどの材料は秋田産で、杉・檜(ヒバ)・松を混用している。土縁は、約 3 尺 5 寸幅の板縁と土間で、土間の外にガラス戸が回る。土間部分はコンクリートに改修されているが、防寒のため地盤面より 1 尺 5 寸上げられている。

写真 2-(1)-18　外観、内部

図 2-(1)-4　平面図

⑱菊谷家住宅

所在地　渡島・神山

建築年　大正 13 年(1924)

構造　木造平家建

屋根形式　切妻造・平入り/柾葺

指定等　歴風文化賞(1993)

写真 2-(1)-19　外観

菊谷家住宅(注 24)は、大正 13 年(1924)に建てられ、切妻造の平入りで、柾葺の農家建築である。神山地区の農家建築のほとんどは、入口を入ると土間で、奥に板敷きの台所がある。大黒柱をはさんで神棚のある茶の間と奥の寝室があり、奥の間の正面奥に仏壇、違い棚、床の間が並んでいる。伝統的な間取りで建てられており、神山の住文化を知る上で貴重な建物である。

⑲ハ戸家住宅

所在地　渡島・湯川町

建築年代　昭和 2 年(1927)

構造　木造平家

屋根形式　寄棟造・平入り/茅葺

写真 2-(1)-20　外観

15 世紀中頃から函館近辺には本州からの移住者が居住していた。1780 年代の湯川村には 50 戸の集落が存在し、古くからの農村集落であった。ハ戸家は幕末に南部ハ戸より移住し、農業と炭焼きをしていた。ハ戸家住宅(注 25)は、昭和 2 年(1927)に建てられ、寄棟造の平入りで、茅葺の農家建築である。空間構成は小さな叉首組を乗せた上屋梁は、大黒柱で支えられ、束を下部の梁が支え、差鴨居で受けている。棟位置は大黒柱とずれている。大黒柱と差鴨居は大きな部材が用いられ、どっしりとした内部空間となっている。間取りは平入りで、入口土間奥には日常の生活空間である板敷きの台所がある。床上には表側に囲炉と神棚のある最も大きな茶の間がある。茶の間奥には寝室が配置されている。主座敷を表側に構え、仏壇と床の間がある縁側には蔀戸を建込んでいる。仏間の奥にも寝室を設けており、整形四間取りとなっている。

⑳藤田家住宅

所在地　渡島・七飯町

建築年代　昭和 3 年(1928)

構造　木造

屋根形式　入母屋/柾葺

藤田家住宅(注 26)は、昭和 3 年(1928)に建てられ、入母屋の柾葺の農家建築である。

写真 2-(1)-21　外観

㉑中村家住宅

所在地　渡島・知内町

建築年代　昭和

構造　木造

屋根形式　主屋　切妻造・柾葺

離れ　寄棟造・柾葺

中村家住宅(注 27)は、昭和に建てられ、主屋が切妻造の柾葺で、離れが寄棟造の柾葺の農家住宅である。

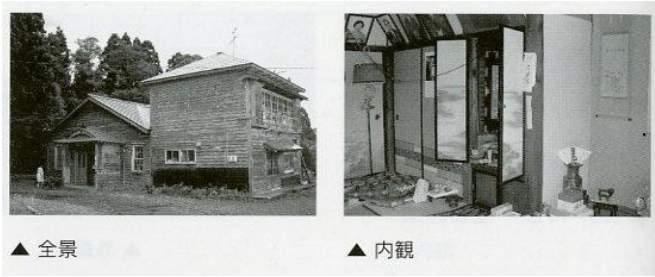


写真 2-(1)-22　外観、内部

(2)北海道における枠の内構法の農家建築

北海道における枠の内構法の農家建築遺構は、文献調査で8件確認された。

①旧樋口家住宅

旧所在地　札幌市白石区厚別町

建設年代　明治33年(1990)

構造・規模　木造平家・133㎡

屋根形式　切妻造・平入り/柾葺

間取り・架構の分類　広間Ⅱ型・C型

旧樋口家住宅(注28)は、明治33年(1990)に建てられた。札幌市の西郊にあたる小野幌は明治20年代に入植の始まったところである。樋口家周辺には富山県出身者が多く、「越中部落」の俗称すら聞かれたという。樋口家は同県上市の出身である。昭和45年11月に北海道開拓記念館へ寄贈され、解体材が保存されている。切妻造の平入りで、柾葺である(写真2-(2)-1)。富山県の民家の間取りを座敷の仏間の位置からみると(図2-(2)-1)、広間Ⅱ型に分類できる。土間ニワがきわめて狭く退化している。一五帖敷のヒロマが主室である。枠の内である広間は、天井下に太い大面取の角材を交叉組上げている。富山県のワクノウチ造りである。広間の梁組は3本×2本の梁組で、枠は四隅柱が支持している方法になっている。富山県の民家の架構形式は、C型に分類できる。小壁の貫は2本になっていて、帯戸の面と床の仕上げは不明である。広間とオモテゲンカンがつながっている。

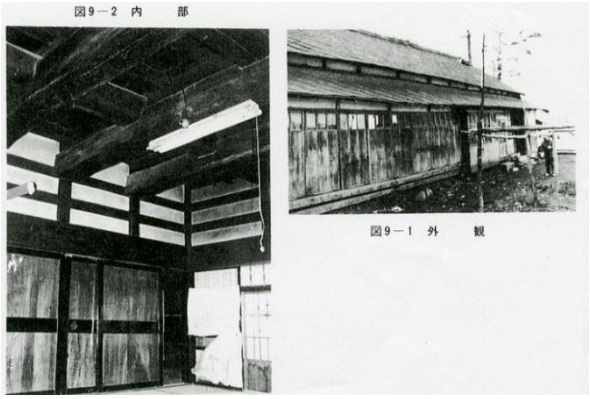


写真2-(2)-1　内部、外観

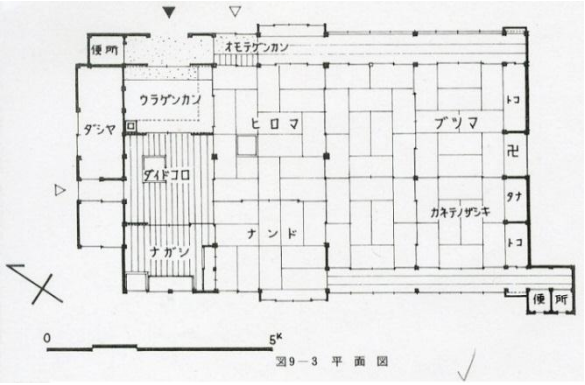


図2-(2)-1　平面図

②宮森家

所在地　栗沢町砺波

建築年代　明治 35 年(1902)

構造　木造 2 階建

屋根形式　寄棟造・平入り/茅葺→金属板葺

間取り・架構形式　広間Ⅲ型・C 型

宮森家住宅(注 29)は、富山県砺波から入植した「越中造」のワクノウチの民家である。富山から移住した当時の住居の掘建小屋から明治 35 年(1902)に郷里富山県の民家のような住宅に変わった。寄棟造の平入りで、茅葺から金属板葺になった(写真 2-(2)-2)。富山県の民家の間取りを座敷の仏間の位置からみると、広間Ⅲ型に分類できる。広間の梁組はキ字型で(写真 2-(2)-3)、広間中央に架かる 2 本の柱が直接支えている。富山県の民家の架構形式は、C 型に分類できる。広間の天井は、板が張られていて、小壁の貫は 2 本になっている。

写真 2-(2)-2　外観

写真 2-(2)-3　広間架構

③田守家住宅

所在地　帯広市西 19 条北 13 丁目

建築年代　明治 38 年(1905)

構造　木造平家

屋根形式　切妻造・平入り/柾葺→金属板葺

間取り・架構形式　不明・C 型

田守家住宅(注 30)は、富山県から入植し、明治 38(1905)年に建てられた。平面では、廊下や縁側はみられず、広間を中心に居室部とサービス部が区分される間取りになっている。内外共に構造体を表した真壁構造で天井も高く、内部の無骨なほどに野太い柱や梁は、見るものに強い印象を与える。こうした広間の架構は、富山の砺波・射水地方に見られる「ワクノウチ造り」を元にしたものと伝えられる。切妻造の平入りで、柾葺から金属板葺になった(写真 2-(2)-4)。広間の梁組はキ字型で(写真 2-(2)-5)、広間中央に架かる 2 本の柱が直接支えている。富山県の民家の架構形式は、C 型に分類できる。

写真 2-(2)-4　外観

写真 2-(2)-5　解説

④西村家

所在地　芦別市福住町

建築年代　大正元年(1912)

屋根形式　アズマダチ・柾葺→金属板葺

間取り・架構の分類　アズマダチ・C 型

西村家住宅(注 31)は、芦別市福住町にある「越中造」の納屋で、大正元年(1912)に建てられ、もとは主屋として使用されていた。アズマダチで、柾葺から金属板葺になった(写真 2-(2)-6)。富山県の民家の間取り分類は広間以外の部屋の実測が不可能だったため、不明である。広間の梁組はキ字型で(写真 2-(2)-7)、枠は四隅柱が支持している方法になっている。富山県の民家の架構形式は、アズマダチに分類できる。広間以外に梁組の部屋がもう 1 個ある。広間の天井は、板が張られていて、小壁の貫は 2 本になっている。

写真 2-(2)-6　外観

写真 2-(2)-7　広間架構

⑤中札内村開拓記念館

旧名称　浜野家住宅

所在地　中札内村大通南 7 丁目

建築年代　大正 8 年(1919)/**移築年代**　昭和 11 年(1936)

構造　木造平家

屋根形式　切妻造・平入り/柾葺→金属板葺

間取り・架構形式　改修のため不明

浜野家住宅(注 32)は、富山県から入植した開拓農家である。大正 8 年(1919)に建てたものの、たびたび香水に見舞われていたため、昭和 11(1936)年、高台に移築し、昭和 63 年(1988)まで使用された。北陸地方の中心とした農家住宅に多く見られる「ワクノウチ造り」で建てられていて、平面はかつてのヒロマとチャノマは吹き抜けて、大きな虹梁の入った豪壮な造りを見ることができる。またオクザシキに平書院が付されている。現在は、開拓資料などを展示した記念館兼そば屋として使用されている。切妻造の平入りで、柾葺から金属板葺になった(写真 2-(2)-8)。富山民家の間取り・架構の分類や広間の梁組の形式は改修のため不明である。

写真 2-(2)-8　外観

写真 2-(2)-9　内部

⑥黒島家

所在地　栗沢町砺波

建築年代　大正 9 年(1920)

施工者　本田栄三郎

屋根形式　寄棟造・平入り/茅葺→金属板葺

間取り・架構形式　広間Ⅲ型・C 型

黒島家住宅(注 33)は、明治 25 年(1892)に富山県東砺波郡から北海道札幌郡に移住し、明治 27 年(1894)に現在地である栗沢町砺波に砺波団体と別に入植した。大正 9 年(1920)にワクノウチの様式を持つ「越中造」民家が建てられた。建築者は本田栄三郎である。寄棟造の平入りで、茅葺から金属板葺になった(写真 2-(2)-10)。富山県の民家の間取りを座敷の仏間の位置からみると、広間Ⅲ型に分類できる。広間の梁組はキ字型で(写真 2-(2)-11)、広間中央に架かる 2 本の柱が直接支えている。富山県の民家の架構形式は、C 型に分類できる。広間の天井は、板が張られていて、小壁の貫は 2 本になっている。

写真 2-(2)-10　外観

写真 2-(2)-11　広間架構

⑦川鳥家住宅

所在地　芦別市北

建築年代　大正 15 年(1926)

構造　木造平家建

屋根形式　切妻造・平入り/柾葺→金属板葺

間取り・架構形式　改修のため不明

芦別市の開拓の明治 27 年(1894)に富山県砺波出身の常盤地区への入植で本格化する。川鳥家住宅(注 34)は、大正に入ると、昭和 23 年(1948)頃まで砺波出身の地元大工が、越中造とか富山風と地元で称する砺波地域の民家形式で、居間の上部で交差した梁組をあらわしにする枠内を用いた農家主屋を一般的に建築した。切妻造の平入りで、柾葺から金属板葺になった(写真 2-(2)-12)。富山民家の間取り・架構の分類や広間の梁組の形式は改修のため不明である。

▲ 南立面

写真 2-(2)-12　外観　南立面

▲ 西立面

写真 2-(2)-13　外観　西立面

⑧末永家

所在地　芦別市黄金町

建築年代　大正 15 年(1926)

施工者　大場大工

屋根形式　切妻造・平入り/柾葺→金属板葺

間取り・架構の分類　広間Ⅲ型・C 型

末永家住宅(注 35)は、富山県東砺波から入植した「越中造」のワクノウチの民家である。大場大工によって大正 15 年(1926)に建築された。切妻造の平入りで、柾葺から金属板葺になった(写真 2-(2)-14)。富山県の民家の間取りを座敷の仏間の位置からみると、広間Ⅲ型に分類できる。広間の梁組はキ字型(写真 2-(2)-15)で、広間中央に架かる 2 本の柱が直接支えている。富山県の民家の架構形式は、C 型に分類できる。広間の天井は、板が張られている。

写真 2-(2)-14　外観

写真 2-(2)-15　広間架構

(3)小結

①北海道の農家建築遺構(表 2-1)

北海道における枠の内構法以外の農家建築遺構は文献調査で、21 件確認された。建築年代は、江戸末期 1 件、明治期 14 件、大正期 3 件、昭和期 3 件で、地域は、空知 7 件、渡島 5 件、胆振 3 件、上川 2 件、檜山 2 件、石狩 1 件、十勝 1 件である。

出身地は、宮城県 5 件、他は兵庫県、徳島県、福島県、香川県、岐阜県、山形県、青森県、新潟県が 1 件ずつある。屋根形式は、寄棟造・茅葺 6 件、寄棟造・柾葺 4 件、切妻造・柾葺 5 件、切妻造・瓦葺 1 件、入母屋造・柾葺 2 件、入母屋造・瓦葺 1 件、切妻造(かぶと)・茅葺と切妻造(石置き)・板葺が 1 件ずつある。国などの有形文化財指定は、国指定 1 件、市指定 3 件、町指定 2 件である。

表2-1 北海道の農家建築遺構の概要

	名称	建築年代	移築年代	地域	所在地	出身地	屋根形式		文化財指定
1	久末家住宅	江戸末期ごろ		檜山	上ノ国	不明	寄棟造	茅葺	上ノ国町指定有形文化財
2	旧岩間農家住宅	明治15年(1882)		石狩	札幌市	宮城県	切妻(石置き)造	板葺	
3	近江家住宅	明治17年(1884)		渡島	赤川町	不明	寄棟造	茅葺	
4	旧三戸部家住宅	明治10年代後半	昭和44年(1969)	胆振	伊達市	宮城県	寄棟造	茅葺	国指定重要文化財
5	泉記念館	明治20年(1887)		空知	栗山町	宮城県	寄棟造	茅葺	
6	迎賓館	明治25年(1892)	昭和44年(1969)	胆振	伊達市	宮城県	入母屋造	柾葺→金属板葺	伊達市指定有形文化財
7	加藤家	明治27年(1984)		胆振	伊達町	宮城県	寄棟造	雅葺	
8	永池家住宅	明治29年(1896)		空知	栗山町	不明	切妻造	柾葺→金属板葺	
9	旧桜井家住宅	明治20年代	昭和8年(1993)	空知	美唄市	兵庫県	切妻造	柾葺	美唄市指定文化財
10	雨竜町開拓記念館	明治33年(1900)以前		空知	雨竜町	不明	寄棟造	柾葺	
11	友成家住宅	明治36年(1903)		空知	浦臼町	徳島県	切妻造	柾葺	
12	滝野庵	明治39年(1906)		檜山	厚沢部町	不明	寄棟造	茅葺	
13	旧松浦家住宅(養蚕民家)	明治42年(1909)		上川	旭川市	福島県	切妻(甲)造	茅葺	市指定文化財
14	明治の家	明治44年(1911)	昭和62年(1987)	上川	東川町	香川県	切妻造	瓦葺	東川町指定文化財
15	石田家住宅	明治期		空知	夕張市	不明	入母屋造	瓦葺	
16	美濃の家	大正5年(1916)頃	昭和63年(1988)	十勝	士幌町	岐阜県	切妻造	柾葺→瓦葺	
17	国兼家住宅	大正6年(1917)		空知	岩見沢市	山形県	寄棟造	柾葺→金属板葺	
18	菊谷家住宅	大正13年(1924)		渡島	神山	不明	切妻造	柾葺	歴風文化賞(1993)
19	ハ戸家住宅	昭和2年(1927)	昭和2年(1927)	渡島	湯川町	青森県	寄棟造	茅葺	
20	藤田家住宅	昭和3年(1928)		渡島	七飯町	不明	入母屋造	柾葺	
21	中村家住宅	昭和		渡島	知内町	新潟県	寄棟造	柾葺	

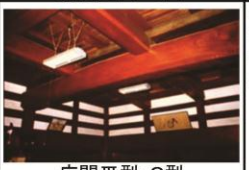
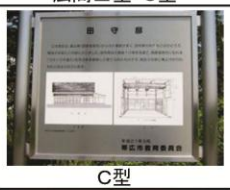
②北海道における枠の内構法の農家建築(表 2-2)

北海道における枠の内構法の農家建築遺構は、文献調査で 8 件確認された。建築年代は、明治 33 年(1990)頃から大正 15 年(1926)までで、明治期 3 件、大正期 5 件である。地域は、空知 5 件、十勝 2 件、石狩 1 件である。出身地は、8 件すべて富山県である。

屋根形式は、切妻造・平入りの柾葺 5 件、寄棟造・平入りの茅葺 2 件、アズマダチの柾葺 1 件である。間取り形式・架構形式は、広間Ⅲ型・C 型が 3 件、当初の間取りが不明の C 型が 2 件、広間Ⅱ型・C 型が 1 件、アズマダチが 1 件、改修のため不明が 1 件である。

広間の梁組は、キ字型 5 件、3 本×2 本の梁組 1 件、改修のため 2 件が不明である。広間の梁組の支持方法は、5 件がキ字型で柱が直接支え、3 本×2 本の梁組 1 件は四隅の柱が支えている。アズマダチの西村家住宅は、梁組はキ字型で、四隅の柱が支え、広間以外にも枠の内の部屋が 1 室ある。天井は、広間の仕様が不明な 2 件を除き、6 件に板が張られている。

表2-2　北海道における枠の内構法の農家建築の概要

	地域・所在地	建築年代・出身地	住宅の形式	広間の写真	広間の仕様
旧樋口家住宅	石狩・札幌市	明治33年(1990)頃 ・富山県	 切妻造・平入り/柾葺	 広間Ⅱ型・C型	・広間の梁の見上げ: 3本×2本の梁組 ・梁の支持方法:四隅柱 ・天井の仕上げ:板 ・小壁の貫:2本 ・広間と玄関のつながり: 表玄関
宮森家住宅	空知・栗沢町	明治35年(1902) ・富山県	 寄棟造・平入り/茅葺→金属板葺	 広間Ⅲ型・C型	・広間の梁の見上げ:キ字型 ・梁の支持方法:柱 ・天井の仕上げ:板 ・小壁の貫:2本
田守家住宅	十勝・帯広市	明治38年(1905) ・富山県	 切妻造・平入り/柾葺→金属板葺	 C型	・広間の梁の見上げ:キ字型 ・梁の支持方法:柱
西村家住宅	空知・芦別市	大正元(1912)年 ・富山県	 アズマダチ/柾葺→金属板葺	 アズマダチ	・広間の梁の見上げ:キ字型 ・梁の支持方法:四隅柱 ・天井の仕上げ:板 ・小壁の貫:2本 ・広間以外の梁の部屋:1室
中札内村開拓記念館	十勝・中札内町	大正8(1919)年 ・富山県から入植	 切妻造・平入り/柾葺→金属板葺	改修のため不明	改修のため不明
黒島家住宅	空知・芦別市	大正9年(1920) ・富山県	 寄棟造・平入り/茅葺→金属板葺	 広間Ⅲ型・C型	・広間の梁の見上げ:キ字型 ・梁の支持方法:柱 ・天井の仕上げ:板 ・小壁の貫:2本
川鳥家住宅	空知・芦別市	大正15年(1926) ・富山県	 切妻造・平入り/柾葺→金属板葺	改修のため不明	改修のため不明
末永家住宅	空知・芦別市	大正15年(1926) ・富山県	 切妻造・平入り/柾葺→金属板葺	 広間Ⅲ型・C型	・広間の梁の見上げ:キ字型 ・天井の仕上げ:板

③まとめ

北海道における農家建築遺構は枠の内構法の農家建築を含め 29 件が文献調査で確認された。建築年代からみると、枠の内構法以外の農家建築遺構は江戸末期から昭和期までのもので、枠の内構法の農家建築遺構は明治 33 年(1990)から大正 15 年(1926)までのものであった。枠の内構法の農家建築は明治 30 年代から北海道に建て始めたと思われる。地域は、全体的に空知地域に多い数があり、枠の内構法の農家建築も 8 件の中に 5 件が空知地域である。特に、枠の内構法の農家建築では 2 件のものが十勝地域であり、十勝地域まで枠の内構法が用いられたことがわかった。屋根形式は、切妻造・平入りの柾葺 5 件、寄棟造・平入りの茅葺 2 件、アズマダチの柾葺 1 件である。また、枠の内構法の農家建築の出身地は全てが富山県であり、間取り形式・架構形式は、広間Ⅲ型・C 型が 3 件、当初の間取りが不明の C 型が 2 件、広間Ⅱ型・C 型が 1 件、アズマダチが 1 件、改修のため不明が 1 件である。広間の梁組の支持方法は、5 件がキ字型で柱が直接支え、3 本×2 本の梁組 1 件は四隅の柱が支えている。

北海道における枠の内構法の農家建築遺構をまとめると、江戸時代末期からである枠の内構法以外の農家建築遺構より年代的に遅かった明治 30 年代、地域的には枠の内構法以外の農家建築遺構と変わらないが、十勝地域まで分布していることがわかった。枠の内構法の農家建築遺構の出身地は富山県であり、屋根形式は切妻造・平入りの柾葺多く、その富山県の建築的特徴である間取り形式・架構形式は、広間の形式が少し違ったが、架構形式は確認できなかった 2 件以外の農家が C 型である。広間の梁組の支持方法は 5 件がキ字型で柱が直接支えているという建築的特徴の共通点がみられた。

第３章　厚真町における枠の内構法の農家建築

(1)厚真町に現存する農家建築

厚真町には、飛谷家住宅(明治 37 年・富山県)、背戸川家住宅(明治 38 年・富山県)、幅田家住宅(明治 40 年代・富山県)、山崎家住宅(明治 44 年・富山県)、畑島家住宅(明治期・富山県)、森田家住宅(明治後期・富山県)、木沢家住宅(大正 2 年・富山県)、小路家住宅(大正初・石川県)の 8 件の農家建築が確認された(注 36)。

①　小路家住宅

小路家住宅は、石川県金沢市二俣町から明治 29 年に入植し、本町の高丘に大正初めに建てられた。小路家住宅は平入り、茅葺(上屋は寄棟造の茅葺、下屋はトタン屋根)、桁行約 7.6 間、梁間約 6 間、建築面積約 36 坪の住宅で、南東に面している(写真 3-(1)-1)。妻入りではないことや、3 畳程の部屋が 2 部屋あることが違いとして挙げられるが、平面構成における各部屋の配置や、茶の間の柱の位置関係、梁組みが桁行きの梁に梁行きの梁を重ね、さらにアマバリを重ねた叉首構造をしていることから、石川県の民家形式でいえば加賀Ⅰ型に分類(注 37)できると思われる。また、間取りだけをみると、富山県の広間Ⅰ型とも類似する点が見られる。

写真 3-(1)- 1　外観

②飛谷家住宅

飛谷家住宅は、富山県からの出身で本町の本郷に明治 37 年に建てられた。現在は、数回の改築をしてはいるものの、建築面積はほぼ変わらない。平入り、柾葺（現トタン屋根)、建築面積約 53 坪の住宅で、仏間や広間は当時のまま残っており、富山県の民家の特徴である枠の内構造(写真 3-(1)-3)の住宅である。

写真 3-(1)- 2　外観

写真 3-(1)- 3　広間架構

③幅田家住宅

幅田家住宅は、富山県からの出身で本町の朝日に明治 40 年代で建てられた。大工は富山県から連れてきており、材料もまた富山県から運んでいる。約 3 年かけて建てられた住宅である。幅田家住宅は玄関が南西向きで(写真 3-(1)-4)、平入り 2 階建て、柾葺 (現在 2 階部増築)、別棟をもつ住宅で、富山県の民家の特徴である枠の内構造の住宅(写真 3-(1)-5)である。

写真 3-(1)- 4　外観

写真 3-(1)- 5　広間架構

④山崎家住宅

山崎家住宅は、富山県からの出身で本町の東和に明治 44 年(1911)で建てられた。山崎家住宅は玄関が南西向きで(写真 3-(1)-6)、平入り、柾葺(現在トタン屋根)、建築面積約 48 坪の富山県の民家の特徴である枠の内構造(写真 3-(1)-7)の住宅である。

写真 3-(1)- 6　外観

写真 3-(1)- 7　広間架構

⑤畑島家住宅

畑島家住宅は、富山県砺波からの出身である。建築年代は明治期で、昭和 9 年(1934)に現在の所在地である本町の朝日に移築された。移築時の大工は厚真町の森田氏である。畑島家旧住宅は玄関が南東向き(写真 3-(1)-8)、平入り、柾葺(現在トタン屋根)、建築面積約 39 坪の富山県の民家の特徴である枠の内構造(写真 3-(1)-9)の住宅である。

写真 3-(1)-8　外観

写真 3-(1)-9　広間架構

⑥森田家住宅

森田家住宅は、出身地、建築年代ともに不明で所在地は宇隆である。森田家住宅は玄関が東向きで(写真 3-(1)-10)、平入り、茅葺(一部トタン屋根)、約 60 坪の富山県の民家の特徴である枠の内構造(写真 3-(1)-11)の住宅である。

写真 3-(1)-10　外観

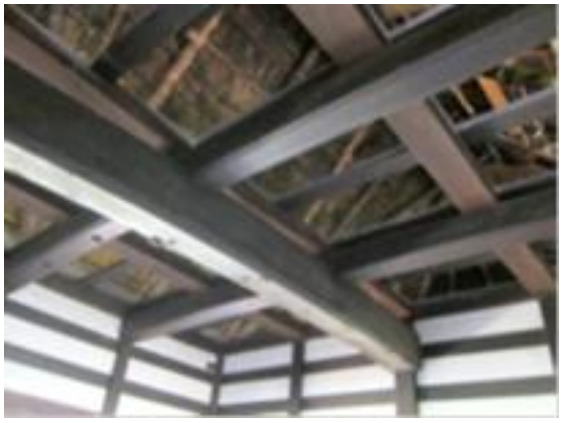


写真 3-(1)-11　広間架構

⑦木沢家住宅

木沢家住宅は、富山県福光の出身で軽舞に入植していた里見五佐によって大正 2 年(1913)に建てられた。木沢家住宅は玄関が南東向きで(写真 3-(1)-12)、妻入り、柾葺(現在トタン屋根)、約 45 坪の富山県の民家の特徴である枠の内構造(写真 3-(1)-13)の住宅である。

写真 3-(1)- 12　外観

写真 3-(1)-13　広間架構

⑧背戸川家住宅

背戸川家住宅は、富山県出身であるが大正 6 年(1917)に、もと住んでいた住宅が火災で焼失してしまったために、山田久太郎氏宅を購入した。建築年代は明治 38 年(1905)頃で、本町の朝日に建てられた。山田氏の出身地は不明であるため住宅の形式について確かではないが、小屋組や平面形式の特徴から石川県の民家ではないかと推測される。背戸川家住宅は平入り、寄棟、茅葺屋根(上屋は茅葺屋根、下屋はトタン屋根)、外壁は張り替えられており、現在は張り壁となっている(写真 3-(1)-14)。桁行約 7 間、梁間約 4 間、建築面積約 30.5 坪の住宅で南西に面している。平面構成における各部屋の配置や、茶の間の柱の位置関係から平面形式を石川県の農家建築の平面形式と比較すると、能登Ⅱ型に分類できる。

写真 3-(1)- 14　外観

(2)厚真町における枠の内構法の農家建築の建築的特徴

飛谷家住宅(明治 37 年・富山県)、幅田家住宅(明治 40 年代・富山県)、山崎家住宅(明治 44 年・富山県)、畑島家住宅(明治期・富山県)、森田家住宅(明治後期・富山県)、木沢家住宅(大正 2 年・富山県)の 6 件の枠の内構法の農家建築が確認された(注 38)。

①飛谷家住宅

所在地　厚真町本郷

建築年　明治 37 年(1904)頃

構造・規模　木造平屋・約 53 坪

屋根形式　切妻造・平入り/茅葺→金属板葺

間取り・架構の分類　広間Ⅲ型・C 型

飛谷家住宅は、切妻造の平入り、建築当初は茅葺で、現在は金属板葺である(写真 3-(2)-1)。玄関から入るとすぐに枠の内の広間がみえる。現在居間、台所としているところは、もと土間であって、玄関からすぐの広間には囲炉裏の跡があるが現在は塞がれている。上手には桁行約 2 間、梁間約 1 間半、約 6 畳の座敷と部屋が梁間方向に並べて配されている。座敷と広間の境の建具は約 4.5 尺の帯戸が 2 枚取り付けられている。座敷は、突き当たりの広間側に仏間、廊下側に床の間が設けられている。富山県の民家の間取りを座敷の仏間の位置からみると、広間Ⅲ型に分類できる(図 3-(2)-1)。

広間の梁組はキ字型で(写真 3-(2)-2)、広間中央に架かる 2 本の柱が直接支えている。約 1 尺角のウシ梁を広間の梁間中央桁行にわたし、梁間方向に梁が 2 本架けられ、この上に桁行の梁を重ねて上屋梁をうける。富山県の民家の架構形式は、C 型に分類できる。広間以外の枠の内の部屋はない。枠の内である広間の大きさは、桁行約 2 間半、梁間約 3 間、約 15 畳である。広間の天井は、板が張られていて、小壁の貫は 2 本になっていて、帯戸の面数と床の仕上げは不明である。広間と玄関のつながりは、広間に玄関が接している。

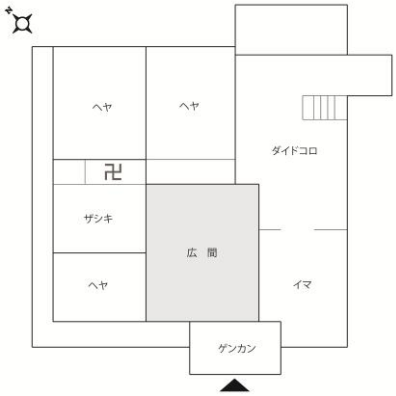


図 3-(2)- 1　平面図

写真 3-(2)-1　外観

写真 3-(2)-2　広間架構

写真 3-(2)-3　座敷

写真 3-(2)-4　帯戸

②幅田家住宅

所在地　厚真町朝日

建築年　明治 40 年代

構造・規模　木造 2 階建・不明

屋根形式　切妻造・平入り/茅葺→金属板葺

間取り・架構の分類　広間Ⅲ型・C 型

幅田家住宅は、切妻造の平入り、建築当初は茅葺で、現在は金属板葺である(写真 3-(2)-5)。玄関から入るとすぐに枠の内の広間がみえる。富山県の民家の間取りを座敷の仏間の位置からみると、広間Ⅲ型に分類できる(図 3-(2)-2)。広間の梁組はキ字型で(写真 3-(2)-6)、広間中央に架かる 2 本の柱が直接支えている。幅 300㎜×セイ 400㎜ の梁を広間の梁間中央の桁行にわたし、梁間方向に幅 260㎜×セイ 330㎜ のチョウナ梁を 2 本架け、さらに桁行方向に 3 本の幅 150㎜×セイ 150㎜ の大引を架けている。富山県の民家の架構形式は、C 型に分類できる。広間以外の枠の内の部屋はない。枠の内である広間の大きさは、桁行約 2 間半、梁間約 3 間、約 15 畳である。広間の天井は、板が張られていて、小壁の貫は 2 本になっていて、帯戸は(写真 3-(2)-7)、広間と座敷境の 1 面で、床の仕上げは不明である。広間と玄関のつながりは、広間に玄関が接している。

写真 3-(2)- 5　外観

写真 3-(2)-6　広間架構

写真 3-(2)-7　帯戸

写真 3-(2)-8　座敷

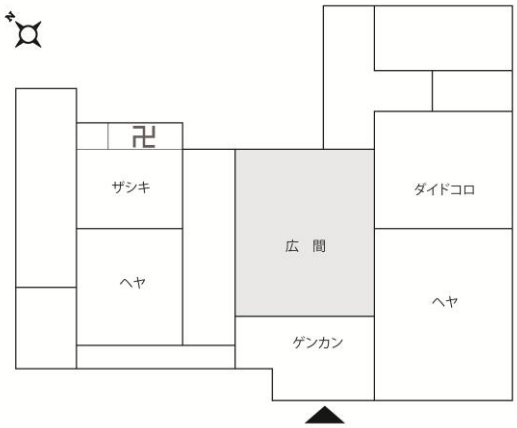


図 3-(2)- 2　平面図

③山崎家住宅

所在地　厚真町東和

建築年　明治 44 年(1911)

構造・規模　木造平屋・約 48 坪

屋根形式　切妻造・平入り/茅葺→金属板葺

間取り・架構の分類　広間Ⅰ－b 型・C 型

山崎家住宅は、切妻造の平入り、建築当初は茅葺で、現在は金属板葺である(写真 3-(2)-9)。富山県の民家の間取りを座敷の仏間の位置からみると、広間Ⅰ－b 型に分類できる(図 3-(2)-3)。広間の梁組はキ字型で(写真 3-(2)-10)、広間中央に架かる 2 本の柱が直接支えている。幅 320㎜×セイ 350㎜ の梁を広間の梁間中央の桁行にわたし、梁間方向に幅 260㎜×セイ 270㎜ のチョウナ梁を 2 本かけ、その上の桁行方向に幅 50㎜×セイ 100㎜ の大引を 6 本架けている。富山県の民家の架構形式は、C 型に分類できる。広間以外の枠の内の部屋はない。枠の内の部屋は、広間以外ではみられない。枠の内である広間の大きさは、桁行約 2 間半、梁間約 2 間半、約 12 畳半である。広間の天井は、板が張られていて、小壁の貫は 2 本になっていて、帯戸は(写真 3-(2)-11)、広間と座敷境の 1 面で、床の仕上げは不明である。広間と玄関のつながりは、広間に玄関が接していない。

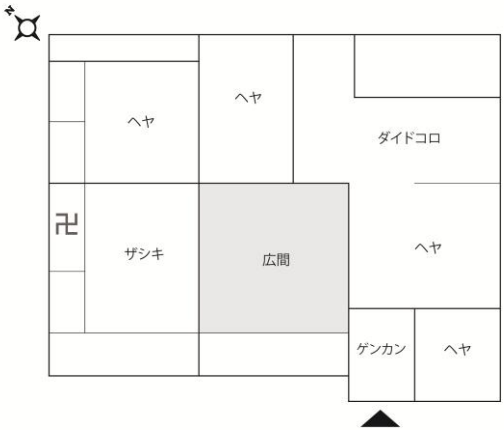


図 3-(2)- 3　平面図

写真 3-(2)- 9　外観

写真 3-(2)-10　広間架構

写真 3-(2)-11　帯戸

写真 3-(2)-12　座敷

④畑島家住宅

所在地　厚真町朝日

建築年　明治期/昭和 9 年(1934)移築

構造・規模　木造平屋・約 39 坪

屋根形式　切妻造・平入り/柾葺→金属板葺

間取り・架構の分類　広間Ⅲ型・C 型

畑島家住宅は、切妻造の平入り、建築当初は柾葺で、現在は金属板葺である(写真 3-(2)-13)。富山県の民家の間取りを座敷の仏間の位置からみると、広間Ⅲ型に分類できる(図 3-(2)-4)。広間の梁組はキ字型で(写真 3-(2)-14)、広間中央に架かる 2 本の柱が直接支えている。幅 320mm×セイ 370mm の梁を広間の梁間中央の桁行にわたし、梁間方向に幅 230mm×セイ 215mm のチョウナ梁を 2 本架け、その上に梁間方向に 5 本のゴヒラをわたしている。富山県の民家の架構形式は、C 型に分類できる。広間以外の枠の内の部屋はない。枠の内の部屋は、広間以外ではみられない。枠の内である広間の大きさは、桁行約 2 間半、梁間約 2 間半、約 12 畳半である。広間の天井は、板が張られていて、小壁の貫は 2 本になっていて、帯戸は(写真 3-(2)-15)、広間と座敷境の 1 面で、床の仕上げは板である。広間と玄関のつながりは、広間に玄関が接していない。

写真 3-(2)-13　外観

写真 3-(2)-14　広間架構

写真 3-(2)-15　帯戸

写真 3-(2)-16　座敷

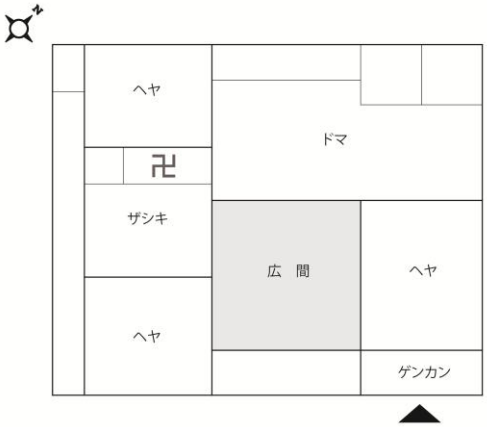


図 3-(2)- 4　平面図

⑤森田家住宅

所在地　厚真町宇隆

建築年　明治期後期

構造・規模　木造 2 階建・約 60 坪

屋根形式　寄棟造・平入り/柾葺→一部金属板葺

間取り・架構の分類　広間Ⅲ型・C 型

森田家住宅は、寄棟造の平入り、建築当初は茅葺で、現在は一部金属板葺である(写真 3-(2)-17)。玄関から入るとすぐに枠の内の広間がみえる。富山県の民家の間取りを座敷の仏間の位置からみると、広間Ⅲ型に分類できる(図3-(2)-5)。広間の梁組はキ字型で(写真3-(2)-18)、広間中央に架かる 2 本の柱が直接支えている。幅 350mm×セイ 360mm の梁を梁間中央の桁行にわたし、その上の梁間方向に幅 200mm×セイ 250mm のチョウナ梁を 2 列架け、その上に 3 本の大引きをわたし、さらに 5 本のゴヒラをわたしている。富山県の民家の架構形式は、C 型に分類できる。広間以外の枠の内の部屋はない。枠の内である広間の大きさは、桁行約 2 間半、梁間約 3 間、約 15 畳半である。広間の天井は、解体中で仕上げが不明である。小壁の貫は 2 本になっていて、帯戸と床の仕上げも解体中で不明である。広間と玄関のつながりは、広間に玄関が接している。

写真 3-(2)-17　外観

写真 3-(2)-18　広間架構

写真 3-(2)-19　座敷

写真 3-(2)-19　小屋組

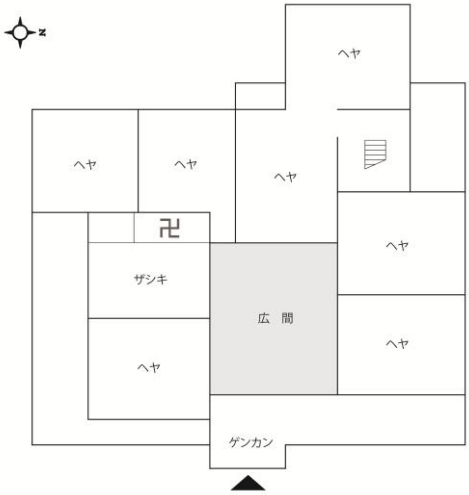


図 3-(2)- 5　平面図

⑥木沢家住宅

所在地　厚真町軽舞

建築年　大正 2 年(1913)

構造・規模　木造平屋・約 45 坪

屋根形式　切妻造・妻入り/茅葺→金属板葺

間取り・架構の分類　広間Ⅲ型・C 型

木沢家住宅は、切妻造の妻入り、建築当初は茅葺で、現在は金属板葺である(写真 3-(2)-20)。玄関から入るとすぐに枠の内の広間がみえる。富山県の民家の間取りを座敷の仏間の位置からみると、広間Ⅲ型に分類できる(図 3-(2)-6)。広間の梁組はキ字型で(写真 3-(2)-21)、広間中央に架かる 2 本の柱が直接支えている。幅 280㎜×セイ 330㎜の梁を広間の桁行中央の梁間にわたし、桁行方向に幅 220㎜×セイ 260㎜のチョウナ梁を 2 本架け、その上に 3 本の大引きを架け、さらに 5 本のゴヒラをわたしている。富山県の民家の架構形式は、C 型に分類できる。広間以外の枠の内の部屋はない。枠の内である広間の大きさは、桁行約 2 間半、梁間約 2 間半、約 12 畳半である。広間の天井は、板が張られていて、小壁の貫は 1 本になっていて、帯戸は(写真 3-(2)-22)、広間と座敷境の 1 面で、床の仕上げは畳である。広間と玄関のつながりは、広間に玄関が接している。

写真 3-(2)-20　外観

写真 3-(2)-21　広間架構

写真 3-(2)-22　帯戸

写真 3-(2)-23　座敷

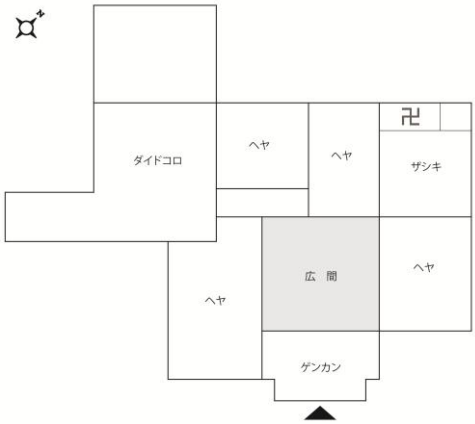


図 3-(2)- 6　平面図

(3)小結

①厚真町に現存する農家建築(表 3-1)

厚真町には、飛谷家住宅(明治 37 年・富山県)、背戸川家住宅(明治 38 年・富山県)、幅田家住宅(明治 40 年代・富山県)、山崎家住宅(明治 44 年・富山県)、畑島家住宅(明治期・富山県)、森

表3-1 厚真町に現存する農家建築の概要

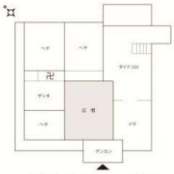
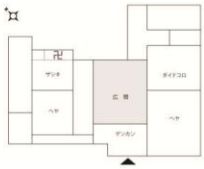
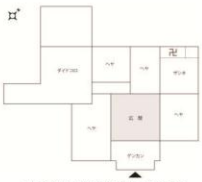
	建築年代・出身地	外観の写真	広間の写真	屋根形式	住宅形式
飛谷家住宅	明治37年(1904) ・富山県			・切妻造 ・平入り ・茅葺→ 金属板葺	・富山県民家の枠の内構法 ・広間Ⅲ型 ・C型
背戸川家住宅	明治38年(1905) ・出身地不明			・寄棟造 ・平入り ・茅葺→ 一部金属板葺	・石川県民家の形式能登Ⅱ型
幅田家住宅	明治40年代 ・富山県			・切妻造 ・平入り ・茅葺→ 金属板葺	・富山県民家の枠の内構法 ・広間Ⅲ型 ・C型
山崎家住宅	明治44年(1911) ・富山県			・切妻造 ・平入り ・茅葺→ 金属板葺	・富山県民家の枠の内構法 ・広間Ⅰ-b型 ・C型
畑島家住宅	明治期 ・富山県			・切妻造 ・平入り ・柾葺→ 金属板葺	・富山県民家の枠の内構法 ・広間Ⅲ型 ・C型
森田家住宅	明治後期 ・富山県			・切妻造 ・平入り ・茅葺→ 一部金属板葺	・富山県民家の枠の内構法 ・広間Ⅲ型 ・C型
木沢家住宅	大正2年(1913) ・富山県			・切妻造 ・妻入り ・柾葺→ 金属板葺	・富山県民家の枠の内構法 ・広間Ⅲ型 ・C型
小路家住宅	大正初め ・石川県			・寄棟造 ・平入り ・茅葺→ 一部金属板葺	・石川県民家の形式の加賀Ⅰ型 ・間取り形式は、富山県の広間Ⅰ型

田家住宅(明治後期・富山県)、木沢家住宅(大正 2 年・富山県)、小路家住宅(大正初・石川県)の 8 件の農家建築が確認された。小路家住宅は石川県の民家形式の加賀Ⅰ型、背戸川家住宅は富山県出身であるが、石川県の民家形式の能登Ⅱ型に分類できる。他の 6 件は、富山県の民家の枠の内構法である。

②厚真町における枠の内構法の農家建築の建築的特徴(表 3-2)

建築年代は、明治 37 年(1904)から大正 2 年(1913)年までで、明治期は飛谷家住宅、幅田家住宅、山崎家住宅、畑島家住宅、森田家住宅の 5 件、大正期は木沢家住宅 1 件である。出身地は 6 件とも富山県である。当初の住宅の規模は、約 39 坪から約 60 坪までで、飛谷家住宅は約 53 坪、

表3-2 厚真町における枠の内構法の農家建築の概要

	建築年代・出身地	住宅の形式	広間の大きさ	広間の写真	広間の仕様
飛谷家住宅	明治37年(1904) ・富山県	 1階/約53坪/切妻造・平入り/ 茅葺→金属板葺	 15畳/2.5間×3間	 広間Ⅲ型・C型	・広間の見上げ:キ字型 ・梁の支持方法:柱 ・天井の仕上げ:板 ・小壁の貫:2本 ・広間以外の枠の内の部屋:無 ・広間と玄関のつながり:有
幅田家住宅	明治40年代 ・富山県	 2階/切妻造・平入り/ 茅葺→金属板葺	 15畳/2.5間×3間	 広間Ⅲ型・C型	・広間の見上げ:キ字型 ・梁の支持方法:柱 ・天井の仕上げ:板 ・小壁の貫:2本 ・帯戸:1面 ・広間以外の枠の内の部屋:無 ・広間と玄関のつながり:有
山崎家住宅	明治44年(1911) ・富山県から入植	 1階/約48坪/切妻造・平入り/ 茅葺→金属板葺	 12畳半/2.5間×2.5間	 広間Ⅰ-b型・C型	・広間の見上げ:キ字型 ・梁の支持方法:柱 ・天井の仕上げ:板 ・小壁の貫:2本 ・帯戸:1面 ・広間以外の枠の内の部屋:無 ・広間と玄関のつながり:無
畑島家住宅	明治期 ・富山県	 1階/約39坪/切妻造・平入り/ 柾葺→金属板葺	 12畳半/2.5間×2.5間	 広間Ⅲ型・C型	・広間の見上げ:キ字型 ・梁の支持方法:柱 ・天井の仕上げ:板 ・小壁の貫:2本 ・帯戸:1面 ・床の仕上げ:板 ・広間以外の枠の内の部屋:無 ・広間と玄関のつながり:無
森田家住宅	明治期後期 ・富山県	 2階/約60坪/寄棟造・平入り/ 茅葺→一部金属板葺	 15畳/2.5間×3間	 広間Ⅲ型・C型	・広間の見上げ:キ字型 ・梁の支持方法:柱 ・天井の仕上げ:解体中・不明 ・小壁の貫:2本 ・帯戸:解体中・不明 ・床の仕上げ:解体中・不明 ・広間以外の枠の内の部屋:無 ・広間と玄関のつながり:有
木沢家住宅	大正2年(1913) ・富山県	 1階/約45坪/切妻造・妻入り/ 柾葺→金属板葺	 12畳半/2.5間×2.5間	 広間Ⅲ型・C型	・広間の見上げ:キ字型 ・梁の支持方法:柱 ・天井の仕上げ:板 ・小壁の貫:1本 ・帯戸:1面 ・床の仕上げ:畳 ・広間以外の枠の内の部屋:無 ・広間と玄関のつながり:有

幅田家住宅は当初の規模が不明、山崎住宅は約 48 坪、畑島家住宅は約 39 坪、森田家住宅は約 60 坪、木沢家住宅は約 45 坪である。

屋根形式は、飛谷家住宅、幅田家住宅、山崎家住宅は、切妻造・平入りで、建築当初は茅葺で、現在は金属板葺である。畑島家住宅は、切妻造・平入りの柾葺で、現在は金属板葺である。森田家住宅は、寄棟造・平入りの茅葺で、現在は一部金属板葺である。木沢家住宅は、切妻造・妻入りの柾葺で、現在は金属板葺である。富山県の民家の間取りを座敷の仏間の位置から分類すると、山崎家住宅は広間Ⅰ-b 型、他の飛谷家住宅、幅田家住宅、畑島家住宅、森田家住宅、木沢家住宅は広間Ⅲ型である。

断面形式は、6 件とも枠の内構法で、広間の梁組はキ字型で、広間中央に架かる梁を 2 本の柱が直接支えている。架構形式は、6 件とも C 型である。枠の内の部屋は、6 件とも広間以外ではみられない。広間の大きさは、飛谷家住宅、幅田家住宅、森田家住宅は 2 間半×3 間の 15 畳、山崎家住宅、畑島家住宅、木沢家住宅は 2 間半×2 間半の 12 畳半である。広間の天井は、森田家住宅は解体途中で不明であるが、5 件は天井に板が張られている。

広間の小壁の貫は、5 件が 2 本で、木沢家住宅が 1 本である。帯戸は、広間と座敷境の 1 面が 4 件で、飛谷家住宅と森田家住宅は確認できなかった。広間と玄関のつながりは、広間に玄関が接しているのは 4 件で、山崎家住宅と畑島家住宅は広間に玄関が接していない。

③まとめ

厚真町の枠の内構法の農家建築 6 件は、明治 37 年(1904)から大正 2 年(1913)年までのもので、6 件全てが富山県出身である。住宅の規模は、約 39 坪から約 60 坪までで、屋根形式は 1 件が寄棟造・平入りの茅葺で、5 件の住宅が切妻造・平入りの茅葺か柾葺きである。富山県の建築的特徴である間取り・架構形式は、広間Ⅰ-b 型・C 型の 1 件以外に 5 件が全て広間Ⅲ型・C 型である。広間の梁組は 6 件ともキ字型で、広間中央に架かる梁を 2 本の柱が直接支えている。

第 2 章の北海道における枠の内構法の農家建築遺構が明治 33 年(1990)から大正 15 年(1926)までのもので、間取り・架構形式、広間の形式をみると、架構形式は確認できなかった 2 件以外の農家がC型であることや広間の梁組の支持方法は5件がキ字型で柱が直接支えているという建築的特徴がみられた。このことからみると、厚真町の枠の内構法の農家建築も明治 30 年代から本格的に建てられ、住宅の規模は 60 坪以下で、間取り・架構形式は広間Ⅲ型・C 型、広間の梁組の支持方法はキ字型で柱が直接支えている形式を用いられ、北海道における枠の内農家建築遺構と建築年代から建築的特徴まで共通点が多くみられる。

第 2 章の北海道における枠の内構法の農家建築遺構と北海道勇払郡厚真町の枠の内構法の農家建築の共通点からみると、北海道の枠の内構法の農家建築は明治 30 年代から本格的に建て始め、屋根形式は切妻造・平入りの茅葺か柾葺が多く、富山県の建築的特徴である間取り・架構形式は広間Ⅲ型・C 型、また広間の梁組の支持方法はキ字型で柱が直接支えている形式が多いことが北海道の枠の内構法の農家建築の特徴をもっていることをわかった。

第４章　富山県砺波地方の枠の内構法の民家遺構の歴史的変遷

北海道勇払郡厚真町を対象に平成 21 年(2009)と平成 23 年(2011)に実測調査を行い、そのなかにも多く確認された枠の内構法の農家建築が富山県砺波地方の建築的特徴をもつ建築形式であることが明らかになった。

現在北海道勇払郡厚真町に残っている枠の内構法の農家建築が入植者の出身地である富山県砺波地方の枠の内構法の農家建築と歴史的意義と建築的特徴の関係性を明らかにするために富山県砺波地方の住宅との比較の必要性があったので、平成 24 年(2012)9 月 10 日から 9 月 14 日の日程で事例調査として北陸地方への現地調査を行った。

調査先は、

・旧根尾家住宅(吉崎御坊)
・入道家住宅
・散居村ミュージアム
・かいにょ苑(旧金岡家住宅)
・あずまだち高瀬
・富山市民俗民芸村

を訪れ、枠の内構法の民家遺構の農家建築 7 件を関係者とのヒアリング、写真での記録、パンフレットの資料、インターネット、文献での調査を行った。

(1)枠の内構法の民家遺構

富山市民俗資料館(江戸時代後期)、入道家住宅(嘉永 6 年(1853))、富山市民芸合掌館(文久 2 年(1862))、旧金岡家住宅(明治 4 年(1871))、富山市陶芸館(明治 27 年(1885))、大正期は砺波散居村ミュージアム伝統館(大正(1915))の 7 件の枠の内構法の民家遺構の建築的特徴を明らかにした。

①富山市民俗資料館

所在地　富山市安養坊 56 番地－1
建築年代　江戸時代後期
移築年度　昭和 49 年(1974)
構造　木造中 2 階建
屋根形式　寄棟造・平入り/茅葺
間取り・架構の分類　広間Ⅱ型・A 型

写真 4-1　外観

富山市民俗資料館(注 39)は、富山市田中村にあった農家住宅を昭和 49 年(1974)に移築した江戸時代後期に建てられた山間部の民家である。材料は欅の太柱と栗の木の間材が多く使われている。寄棟造の平入り、茅葺で、内部は 1 階と中 2 階である(写真 4－1)。玄関から入るとすぐに枠の内の広間がみえる。富山県の民家の間取りを座敷の仏間の位置からみると、広間Ⅱ型に分類できる(図 4－1)。広間の梁組はキ字型で(写真 4－2)、広間中央に架かる 2 本の柱が直接支えている(写真 4－4)。富山県の民家の架構形式は、A 型に分類できる。広間以外の枠の内の部屋はない。枠の内で

ある広間の大きさは、桁行約 2 間半、梁間約 3 間、約 15 畳である。広間の天井は、板が張られていて、小壁の貫は 2 本になっている。帯戸は 3 面、床の仕上げは板である。広間と玄関のつながりは、広間に玄関が接している。玄関はキリイシである

写真 4- 2　広間架構

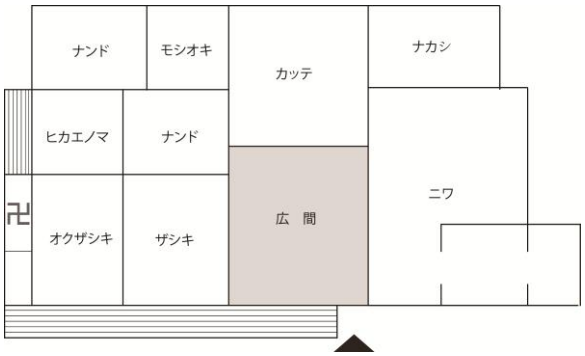


写真 4- 3　部屋の天井

図 4- 1　1 階平面図

写真 4- 4　枠の支持方法

写真 4- 5　座敷

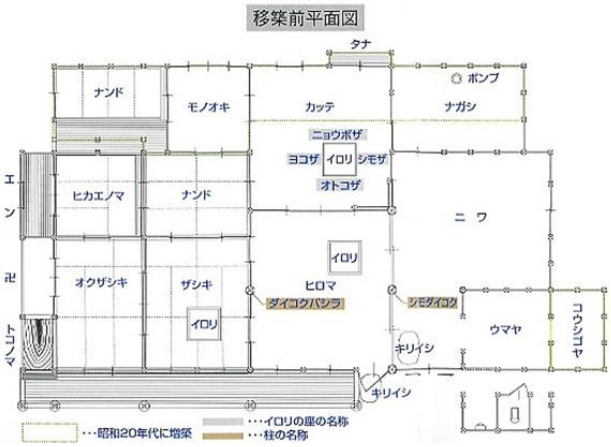


図 4- 2　パンフレットの平面図

②入道家住宅

住所地　砺波市太田

建築年代　嘉永 6 年(1853)/大正 11 年(1992)アズマダチ

構造　木造 2 階建

屋根形式　寄棟造・平入り/茅葺

→切妻造・妻入り/桟瓦葺のアズマダチ

間取り・架構の分類　広間Ⅲ型・C 型(アヅマダチ)

入道家住宅(注 40)は、大規模な広間型農家で、砺波平野の散居村に多いアズマダチ民家の典型である。嘉永 6(1853)年、八代忠兵衛の代に村大工甚助によって建てられた。住宅は東を向き、回りを杉のカイニョが囲んでいて、主屋は間口十一間、奥行十間半で、切妻造り、桟瓦葺、妻入、正面に三角型の大きな妻を見せるアズマダチの外観を呈する(写真 4－6)。建築当初は寄棟造の平入り、茅葺の 2 階であったが、明治期から変わりはじめ、大正期には切妻造の妻入り、桟瓦葺きのアズマダチになる。玄関から入るとすぐに枠の内の広間がみえる。富山県の民家の間取りを座敷の仏間の位置からみると、広間Ⅲ型に分類できる(図 4－3)。広間の梁組はキ字型で(写真 4－7)、広間中央に架かる 2 本の柱が直接支えている(写真 4－8)。富山県の民家の架構形式は、C 型のアズマダチに分類できる。広間以外の枠の内の部屋は茶の間の 1 室がある。枠の内である広間の大きさは、桁行約 3 間、梁間約 2 間半、約 15 畳である。広間の天井は、板が張られていて、小壁の貫は 2 本で板壁になっていて、帯戸は 2 面、床の仕上げは板である。広間と玄関のつながりは、広間に玄関が接している。玄関はカミゲンカンである。

写真 4- 6　外観

写真 4-7　広間架構

写真 4-8　枠の支持方法

写真 4- 9　座敷

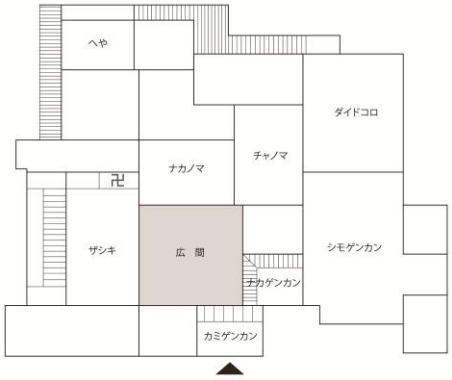


図 4- 1　1 階平面図

写真　4-10 縁側

写真 4- 11　茶の間の架構(枠の内)

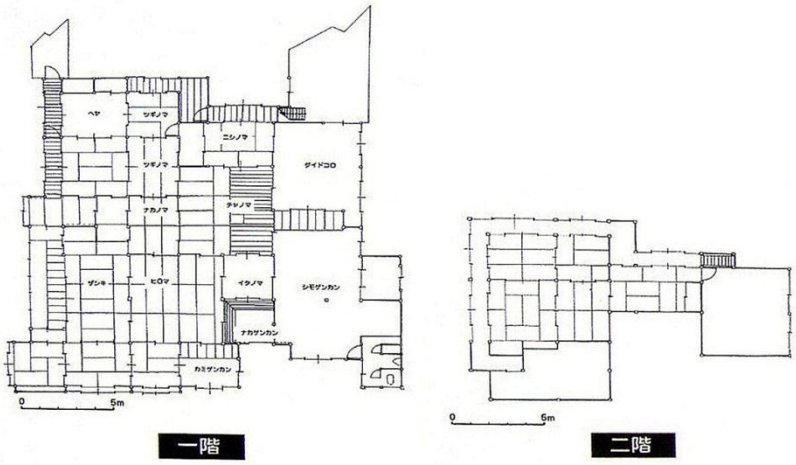


図 4- 2　パンフレットの平面図

③富山市民芸合掌館

住所地　富山市安養坊 56 番地－1

建築年代　文久 2 年(1862)

構造　木造 2 階建

屋根形式　入母室・平入り/合掌造/茅葺

間取り・架構の分類　広間Ⅱ型・A 型

富山市民芸合掌館(注 41)は、富山市山田数納(旧山田村)に文久 2 年（1862）建てられた合掌造(注 42)の民家を昭和 43 年(1968)に移築したものである。豪雪や風雨に耐える巨大な柱や梁の用材は主に欅(けやき)で、木材の調達から建築、完成までに 8 年を要したといわれている。入母室・平入りの合掌造の茅葺であり、内部は 2 階である(写真４-12)。玄関から入るとすぐに枠の内の広間がみえる。富山県の民家の間取りを座敷の仏間の位置からみると、広間Ⅱ型に分類できる。広間の梁組はキ字型で(写真 4-13)、広間中央に架かる 2 本の柱が直接支えている。富山県の民家の架構形式は、A 型に分類できる。広間以外の枠の内の部屋はない。枠の内である広間の大きさは､桁行約 4 間､梁間約 3 間、約 24 畳である。広間の天井は、簀子(竹)が張られていて、小壁の貫は 2 本になっていて、床の仕上げは板である。広間と玄関のつながりは、広間に玄関が接している。玄関はシキダイである。

写真 4- 12 外観

写真 4- 13 広間架構

写真 4- 14 座敷

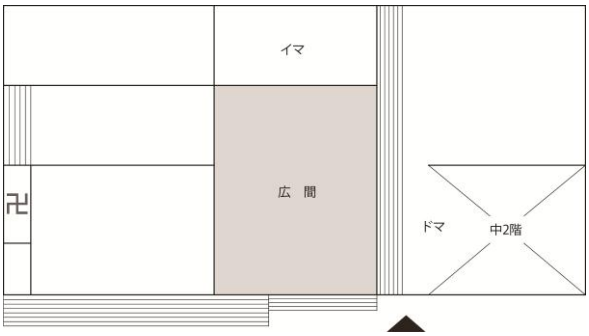


図 4- 3　1 階平面図

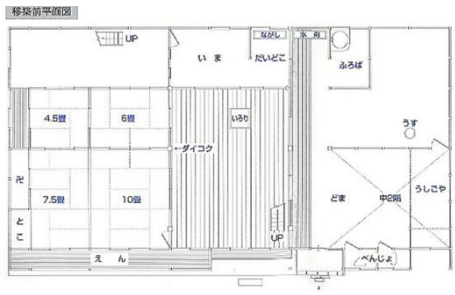


図 4- 4 パンフレットの平面図

④旧金岡住宅

住所地　富山県砺波市豊町 1 丁目 2－10

建築年代　明治 4 年(1871)

構造　木造 2 階建

屋根形式　寄棟造・平入り/茅葺

間取り・架構の分類　広間Ⅲ型・C 型

旧金岡家住宅(注 43)は、砺波平野散村地帯の典型的な大型農家である。二代金岡庄平の代の明治 4 年(1871)に建てられ、材料・構法ともに上質で、江戸時代末期のもっとも進んだ技術による民家建築といえる。平成 14 年 3 月 20 日砺波市指定文化財に指定された。敷地は 2,140 ㎡(約 638 坪)、広さは 1 階部分が 280 ㎡(85 坪)、住宅は東向きに建っている。寄棟造の平入り、茅葺の 2 階である(写真 4－15)。玄関から入るとすぐに枠の内の広間がみえる。富山県の民家の間取りを座敷の仏間の位置からみると、広間Ⅲ型に分類できる(図 4－7)。広間の梁組はキ字型で(写真 4－16)、広間中央に架かる 2 本の柱が直接支えている。富山県の民家の架構形式は、C 型に分類できる。広間以外の枠の内の部屋はない。枠の内である広間の大きさは、桁行約 3 間、梁間約 2 間半、約 15 畳である。広間の天井は、板が張られていて、小壁の貫は 2 本になっている。帯戸は 3 面、床の仕上げは畳である。広間と玄関のつながりは、広間に玄関が接している。玄関はゲンカである。

写真 4-15 外観

写真 4-16 広間架構

写真 4-17 座敷

写真 4-18 小屋組

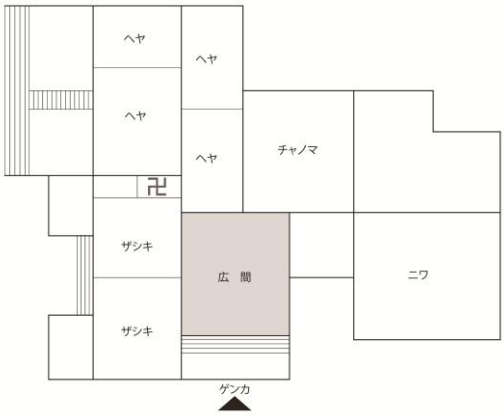


図 4- 5　1 階平面図

写真 4-19 縁側

写真 4-20 囲炉裏

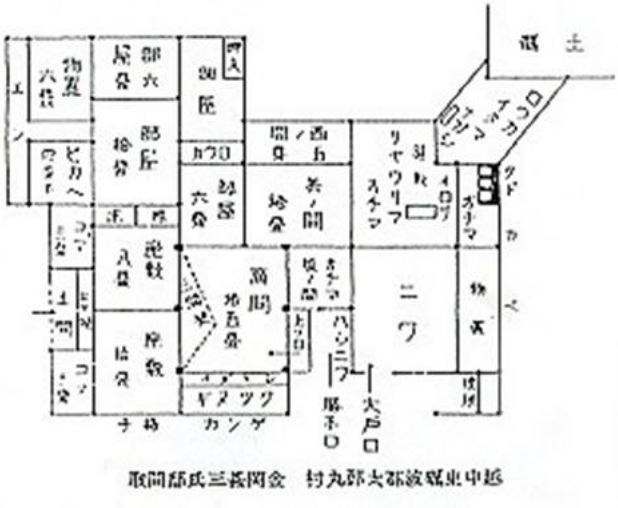


図 4-8　パンフレットの平面図

⑤旧根尾家住宅

住所地　福井県あわら市吉崎一丁目 902 番地 1

建築年代　明治 14 年(1881)

構造　木造 2 階建

屋根形式　アズマダチ(茅葺→瓦葺)

間取り・構造の分類　(広間Ⅲ型)・アズマダチ型

旧根尾家住宅(注 44)は、明治 14(1881)年に建てられ昭和 54 年(1979)に富山県福井県あわら市の現在の所在地に移築された。アズマダチで建築当初は茅葺だったが、現在は瓦葺の 2 階である(写真４-21)。玄関から入るとすぐに枠の内の広間がみえる。富山県の民家の間取りを座敷の仏間の位置からみると、広間Ⅲ型に分類できる(図 4－9)。広間の梁組は井桁型で(写真４-22)、梁行に 2 本の梁がわたし、そのうえに桁行方向に梁が 2 本架けられ、この上に桁行の梁を重ねて上屋梁をうける。枠は四隅柱が支持している方法になっている。富山県の民家の架構形式は、アズマダチに分類できる。広間以外の枠の内の部屋はない。枠の内である広間の大きさは、桁行約 3 間半、梁間約 4 間、約 28 畳である。広間の天井はなく、小壁の貫は 2 本になっている。帯戸は 2 面、床の仕上げは畳である。広間と玄関のつながりは、広間に玄関が接している。玄関は玄関の間である。

写真 4-21 外観

写真 4-22 広間架構

写真 4-23 帯戸

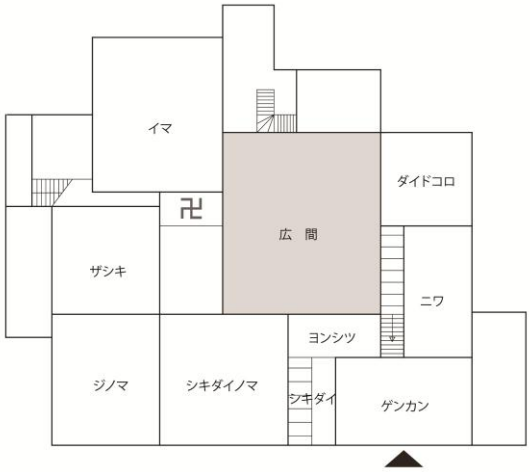


図 4-9　1 階平面図

図 4-24　座敷

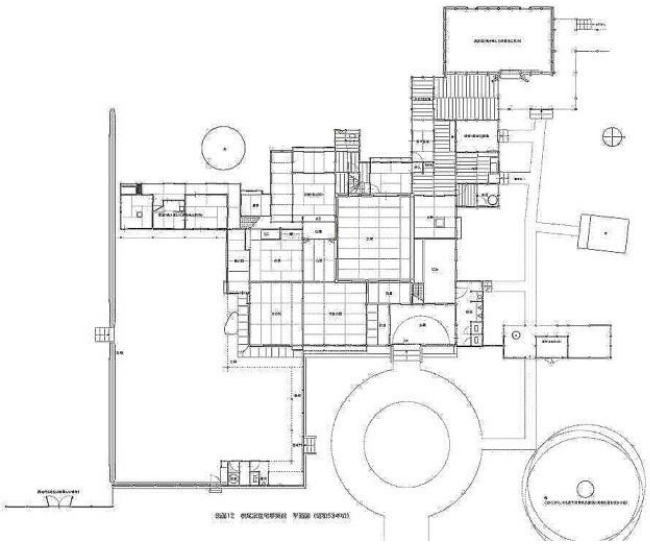


図 4-10　報告書の平面図

⑥富山市陶芸館

住所地　富山市安養坊 56 番地の 1

建築年代　明治 27 年(1885)

構造　木造平屋

屋根形式　アズマダチ

間取り・架構の分類　広間Ⅱ型・アヅマダチ

陶芸館(注 45)は、明治 27 年(1894)に市内大塚に建てられた豪農の住宅の一部を移築し、昭和 56 年（1981）から富山市陶芸館として紹介されている。富山県の平野部に建てられた切妻造民家「アズマダチ」の典型として評価を受け、平成 9 年（1997）に国の登録有形文化財に登録された。建物は、良質な材料を吟味して集め、高度な技術で作られている。アズマダチの瓦葺の本住宅は(写真 4－25)、玄関から入るとすぐに枠の内の広間がみえる。富山県の民家の間取りを座敷の仏間の位置からみると、広間Ⅱ型に分類できる(図 4－11)。広間の梁組は井桁型で(写真 4－26)、梁行に 2 本の梁がわたし、そのうえに桁行方向に梁が 2 本架けられ、この上に桁行の梁を重ねて上屋梁をうける。枠は四隅柱が支持している方法になっている。富山県の民家の架構形式は、アズマダチに分類できる。広間以外の枠の内の部屋は茶の間の 1 室がある(写真 4－28)。枠の内である広間の大きさは、桁行約 3 間、梁間約 2 間半、約 15 畳である。広間の天井は、板が張られていて、小壁の貫は3本になっている。帯戸は 2 面、床の仕上げは板である。広間と玄関のつながりは、広間に玄関が接している。玄関はカミゲンカンである。

写真 4-25　外観

写真 4-26　広間架構

写真 4-27　座敷

写真 4-28　茶の間の広間架構

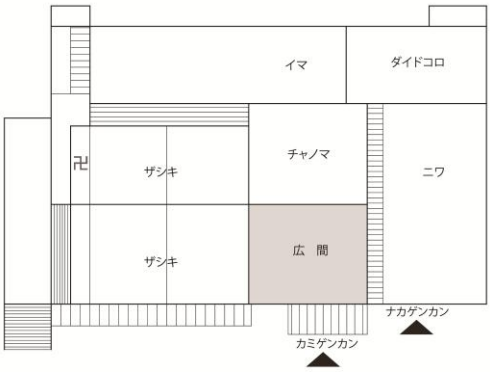


図 4-11　1 階平面図

写真 4- 29　広間

写真 4 - 30　縁側

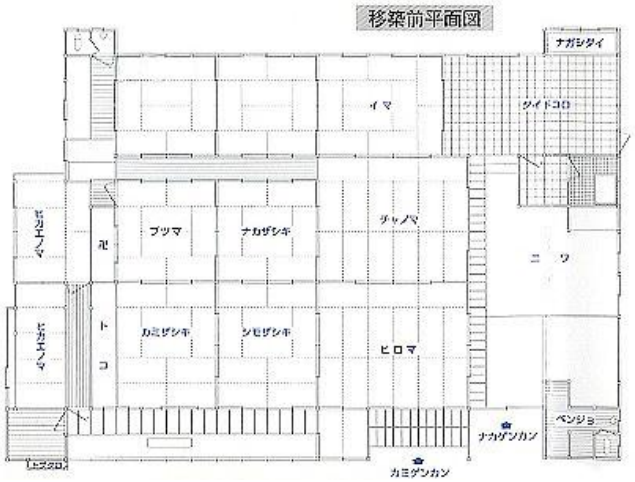


図 4-12　パンフレットの平面図

⑦となみ散居村ミュージアム伝統館

住所地　富山県砺波市太郎丸 80 番地

建築年代　大正 4 年(1915)

構造　木造 2 階建

屋根形式　アズマダチ

間取り・架構の分類　広間Ⅲ型・C 型(アヅマダチ)

伝統館の旧家屋(注 46)は、大正 4 年(1915)に建築され、昭和 33 年(1958)に一度増改築されている。「アズマダチ」の白壁、「ゲンカ」の土間、大屋根と下屋根のバランスなど、砺波地方の一般的な伝統家屋を再現している。屋内にはイロリやシバヤ、屋外には納屋、灰小屋を配置して散村農家の屋敷林となっている。アズマダチの 2 階である(写真 4－31)。玄関から入るとすぐに枠の内の広間がみえる。富山県の民家の間取りを座敷の仏間の位置からみると、広間Ⅲ型に分類できる(図 4－13)。広間の梁組はキ字型(写真 4－32)で、広間中央に架かる 2 本の柱が直接支えている。富山県の民家の架構形式は、アズマダチ型に分類できる。広間以外の枠の内の部屋はない。枠の内である広間の大きさは、桁行約 2 間、梁間約 2 間半、約 10 畳である。広間の天井は、簀子(竹)が張られていて、小壁の貫は 2 本になっている。帯戸は 2 面、床の仕上げは板である。広間と玄関のつながりは、広間に玄関が接している。玄関はゲンカである。

写真 4-31　外観

写真 4-32　広間架構

写真 4-33　広間

写真 4-34　座敷

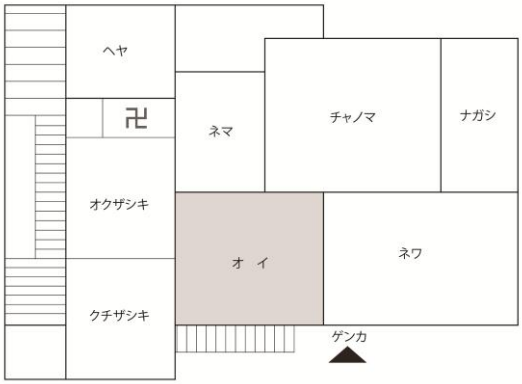


図 4-13　1 階平面図

写真 4- 35　囲炉裏

写真 4- 36　縁側

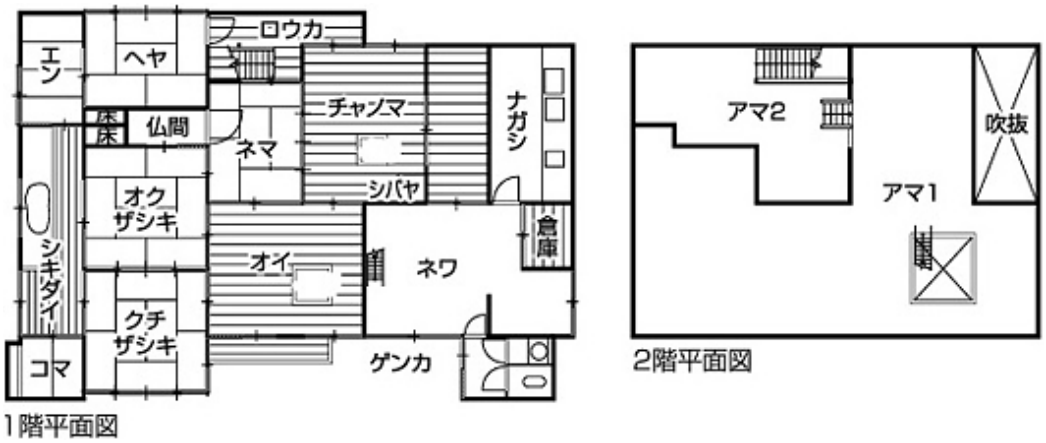
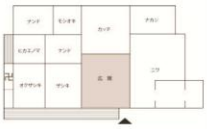
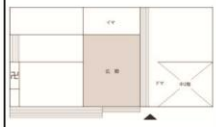
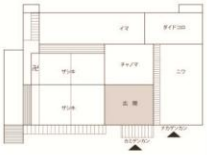


図 4- 14　パンフレットの平面図

(2)小結(表 4-1)

建築年代は、江戸時代後期から大正 4 年(1915)までで、江戸期は富山市民俗資料館 1 件、明治期は旧根尾家住宅、入道家住宅、富山市民芸合掌館、旧金岡家住宅、富山市陶芸館 5 件、大正期は砺波散居村ミュージアム伝統館 1 件である。

表4-1　富山県砺波地方の枠の内構法の民家遺構の概要

	建築年代	住宅の形式	広間の大きさ	広間の写真	広間の仕様
富山市民俗資料館	江戸時代後期	 中2階/寄棟造・平入り/茅葺	 15畳/2.5間×3間	 広間Ⅱ型 ・A型	・広間の梁の見上げ:キ字型 ・梁の支持方法:柱 ・天井の仕上げ:板 ・小壁の貫:2本 ・帯戸:3面 ・床の仕上げ:板 ・広間以外の梁の部屋:無 ・広間と玄関のつながり:キリイシ
入道家住宅	嘉永6年(1853) →大正期から アズマダチ	 2階/寄棟造・平入り/茅葺→ 切妻造・妻入り/桟瓦葺のアズマダチ	 15畳/ 3間×2.5間	 広間Ⅲ型・C型(アズマダチ)	・広間の梁の見上げ:キ字型 ・梁の支持方法:柱 ・天井の仕上げ:板 ・小壁の貫:2本(板壁) ・帯戸:2面 ・床の仕上げ:板 ・広間以外の梁の部屋: 茶の間1室 ・広間と玄関のつながり: カミゲンカン
富山市民芸合掌館	文久2年(1862)	 2階/入母室・平入り/合掌造/茅葺	 24畳/4間×3間	 広間Ⅱ型・A型	・広間の梁の見上げ:キ字型 ・梁の支持方法:柱 ・天井の仕上げ:簀子(竹) ・小壁の貫:2本 ・床の仕上げ:板 ・広間以外の梁の部屋:無 ・広間と玄関のつながり:シキダイ
旧金岡家住宅	明治4年(1871)	 2階/寄棟造・平入り/茅葺	 15畳/3間×2.5間	 広間Ⅲ型・C型	・広間の梁の見上げ:キ字型 ・梁の支持方法:柱 ・天井の仕上げ:板 ・小壁の貫:2本 ・帯戸:3面 ・床の仕上げ:畳 ・広間以外の梁の部屋:無 ・広間と玄関のつながり:ゲンカ
旧根尾家住宅	明治14年(1881)	 2階/茅葺 →アズマダチ	 28畳/3.5間×4間	 (広間Ⅲ型)・アズマダチ	・広間の梁の見上げ:井桁型 ・梁の支持方法:四隅柱 ・天井の仕上げ:無 ・小壁の貫:2本 ・帯戸:2面 ・床の仕上げ:畳 ・広間以外の梁の部屋:無 ・広間と玄関のつながり: 玄関の間
富山市陶芸館	明治27年(1885)	 アズマダチ	 15畳/3間×2.5間	 広間Ⅱ型・アズマダチ	・広間の梁の見上げ:井桁型 ・梁の支持方法:四隅柱 ・天井の仕上げ:板 ・小壁の貫:3本 ・帯戸:2面 ・床の仕上げ:板 ・広間以外の梁の部屋: 茶の間1室 ・広間と玄関のつながり: カミゲンカン
となみ散居村ミュージアム伝統館	大正4年(1915)	 2階/アズマダチ	 10畳/2間×2.5間	 広間Ⅲ型・C型(アズマダチ)	・広間の梁の見上げ:キ字型 ・梁の支持方法:柱 ・天井の仕上げ:簀子(竹) ・小壁の貫:2本 ・帯戸:2面 ・床の仕上げ:板 ・広間以外の梁の部屋:無 ・広間と玄関のつながり:ゲンカ

住宅の規模は、富山市陶芸館以外は 2 階建で、100 坪以上である。屋根形式は、寄棟造・平入りの茅葺 2 件、アズマダチの瓦葺 4 件、切妻造・平入りで合掌造の茅葺 1 件である。富山県の民

家の間取りを座敷の仏間の位置から分類すると、富山市民俗資料館、富山市民芸合掌館、富山市陶芸館が広間Ⅱ型、その他は広間Ⅲ型である。断面形式は、7 件とも枠の内構法で、広間の梁組は旧根尾家住宅、富山市陶芸館が井桁で、他の 5 件はキ字型である。架構形式は、富山市民俗資料館と富山市民芸合掌館が A 型、旧金岡家住宅が C 型、旧根尾家住宅と富山市陶芸館がアズマダチ、となみ散居村ミュージアム伝統館と入道家住宅がアズマダチの C 型である。枠の内の部屋は広間以外では入道家住宅と富山市陶芸館のチャノマ 1 室である。広間の大きさは、2 間半×3 間の 15 畳 4 件、2 間×2 間半の 10 畳、4 間×3 間の 24 畳、3 間半×4 間の 28 畳が各 1 件ある。広間の天井は、旧根尾家住宅にはなく、他の 6 件は天井に板が張られている。広間の小壁の貫は、富山市陶芸館が 3 本、他は 2 本である。帯戸は、富山市民芸合掌館は不明で、富山市民俗資料館と旧金岡家住宅が 3 面、その他の 4 件が 2 面である。広間と玄関のつながりは、富山市民俗資料館と富山市民芸合掌館は広間に玄関が接してなく、他の 5 件は広間に玄関が接している。

(3)枠の内構法の民家遺構の歴史的変遷(図 4-(3)-1)

砺波地方の農家は、明治期に入ると「屋根をおろす」といって、茅葺の主屋根と下屋根を取り払い、瓦葺きの一枚の大屋根をかけるようになり、これをアズマダチというが(注 47)、瓦が普及するようになる明治末期ごろから一般化する(注 48)。入道家住宅は現在切妻造・妻入り、桟瓦葺で、正面に三角形の大きな妻をみせるアズマダチである。嘉永 6 年(1853)の建築当初は寄棟造・平入りの茅葺であったが、明治 27 年(1894)に後部を切妻造にして、大正 11 年(1922)に前側も切妻造にしてアズマダチの形式とした(注 49)。間取り形式・架構形式は広間Ⅲ型・C 型で建築当初と変わらない。

図 4-(3)-1　入道家住宅の枠の内構法の歴史的変遷

第５章　厚真町における枠の内構法の農家遺構の歴史的意義

(1)厚真町と富山県砺波地方における枠の内構法の民家遺構枠の比較

明治期以降の北海道勇払郡厚真町における枠の内構法の農家建築を、富山県砺波地方における枠の内構法の民家遺構との比較をすると、

①建築年代：厚真町は明治 37 年(1904)から大正 2 年(1913)、砺波地方は江戸時代後期から大正 4 年(1915)である。

②間取り形式・架構形式：厚真町は広間Ⅲ型・C 型の茅葺か柾葺で、砺波地方で明治期に広間Ⅲ型・C 型がアズマダチに変わる前の形式である。

③住宅規模：厚真町は 60 坪以下で、砺波地方は 100 坪を超える。現在、砺波地方では厚真町の規模の農家は残っていない。

④広間の形式と住宅規模：広間の大きさは厚真町が 2 間×2 間半～3 間で、砺波地方の大きさに含まれ、農家全体の規模は小さい。砺波地方の農家の規模は大きいため、広間他にも枠の内の部屋があるが、厚真町の農家は規模が小さいため、広間の他に枠の内をもつ部屋はない。

⑤広間の仕様：広間の梁組は厚真町が全てキ字型で、2 本の柱が支えている。砺波地方は 2 件が井桁で四隅の柱が支え、他はキ字型で 2 本の柱が支えている。広間の天井は厚真町の 6 件に板が張られ、砺波地方は6件に板が張られている。広間の小壁の貫は厚真町も砺波地方も2本が多く、帯戸は厚真町が 1 面、砺波地方が 2 面か 3 面であり、床は板か畳が敷いてある。広間と玄関のつながりは、厚真町で 4 件、砺波地方で５件接している。

(2)厚真町と富山県砺波地方における枠の内構法の民家遺構の歴史的変遷(図５－１)

厚真町の枠の内は、富山県の民家の間取り形式・架構形式・屋根形式からみると、広間Ⅲ型・

図 5-1　厚真町と砺波地方における枠の内構法の歴史的変遷

C 型で、切妻造・平入り、茅葺か柾葺である。砺波地方の枠の内は、江戸期には、広間Ⅱ型・A 型の寄棟造・平入りの茅葺で、嘉永 6 年(1853)頃から明治 4 年(1871)には、広間Ⅲ型・C 型の寄棟造か切妻造・平入りの茅葺に変わる。大正期に入ると、広間Ⅲ型・C 型のまま屋根がアズマダチに変わる。厚真町の枠の内は、砺波地方の枠の内の歴史的な変遷からみると、アズマダチに変わる前の形式である。

第６章　結論

厚真町の枠の内構法の農家は、歴史的な意義からみると、砺波地方の大正期にはみられなくなる形式や規模で、その農家建築が厚真町に残っていることは、歴史的に貴重なものであることが明らかになった。また、建築的な特徴からみると、厚真町の枠の内構法の農家は砺波地方の枠の内構法の農家が大正期にアズマダチに変わる前の広間Ⅲ型・C 型で、茅葺か柾葺である。砺波地方の枠の内の農家は 100 坪を超えるが、厚真町の枠の内構法の農家は 60 坪以下で砺波地方より規模が小さい。厚真町の枠の内構法の広間の大きさは、2 間×2 間半～3 間で、砺波地方の枠の内構法の広間の大きさに含まれるが、厚真町の枠の内構法の農家は規模が小さいため、広間以外に枠の内をもつ部屋はみられない。厚真町の広間の梁組はすべてキ字型で直接柱が支え、砺波地方の広間の梁組では 2 件が井桁で四隅の柱が支え、その他はキ字型で直接柱が支えている。広間の天井、広間の小壁の貫、広間境の帯戸の仕様と広間と玄関のつながりには類似点がみられた。

注記

注1)　日本の民家調査報告書集成　第 1 巻　北海道・東北地方の民家　北海道・青森・秋田、東洋書林、pp.2-6、1998.9

注2)　厚真町史、厚真町役場、1998.3

注3)　飯島沙織：北海道における明治後期以降の「越中造」民家の史的研究、札幌市立大学デザイン学部卒業研究、2010.3

注4)　富山県ホームページ：http://www.pref.toyama.jp/gaiyou/gaiyou.ht
砺波市ホームページ：http://www.city.tonami.toyama.jp/tonamisypher/www/info/detail.jsp?id=5330

注5)　日本の民家調査報告書集成　第 8 巻　中部地方の民家　富山・石川・福井、東洋書林、pp.4-7、1998.6　所収

注6)　注 4 参照

注7)　北海道の近代和風建築‐近代和風建築総合調査報告書‐、北海道教育委員会、p.159、2007.3

注8)　日本建築学会：日本の建築　第 1 巻/北海道・東北、新建築社、pp.46-47、1998.10

注9)　角幸博：函館の建築探訪、北海道新聞社、p.131、1997.9

注10)　日本建築学会：日本の建築　第 1 巻/北海道・東北、新建築社、p.138、1998.10

注11)　日本の民家 調査報告書集成 1 北海道・東北の民家 北海道・青森・秋田 東洋書林 1998.9

注12)　http://www.pref.hokkaido.jp/kseikatu/ks-bsbsk/bunkashigen/index.html

注13)　日本の民家 調査報告書集成 1 北海道・東北の民家 北海道・青森・秋田 東洋書林 1998.9

注14)　北海道の近代和風建築‐近代和風建築総合調査報告書‐、北海道教育委員会、p.165、2007.3

注15)　北海道の近代和風建築‐近代和風建築総合調査報告書‐、北海道教育委員会、p.111、2007.3

注16)　北海道の近代和風建築‐近代和風建築総合調査報告書‐、北海道教育委員会、p.165、2007.3

注17)　北海道の近代和風建築‐近代和風建築総合調査報告書‐、北海道教育委員会、p.116、2007.3

注18)　北海道の近代和風建築‐近代和風建築総合調査報告書‐、北海道教育委員会、p.159、2007.3

注19)　北海道の近代和風建築‐近代和風建築総合調査報告書‐、北海道教育委員会、p.122、2007.3

注20)　北海道の近代和風建築‐近代和風建築総合調査報告書‐、北海道教育委員会、p.124、2007.3

注21)　北海道の近代和風建築‐近代和風建築総合調査報告書‐、北海道教育委員会、p.165、2007.3

注22)　角幸博：道東の建築探訪、北海道新聞社、p.86、2007.5

注23)　北海道の近代和風建築‐近代和風建築総合調査報告書‐、北海道教育委員会、p.110、2007.3

注24)　角幸博：函館の建築探訪、北海道新聞社、p.129、1997.9

注25)　角幸博：函館の建築探訪、北海道新聞社、p.125、1997.9。北海道の近代和風建築‐近代和風建築総合調査報告書‐、北海道教育委員会、p.53、2007.3

注26)　北海道の近代和風建築‐近代和風建築総合調査報告書‐、北海道教育委員会、p.158、2007.3

注27)　北海道の近代和風建築‐近代和風建築総合調査報告書‐、北海道教育委員会、p.158、2007.3

注28)　日本の民家 調査報告書集成 1 北海道・東北の民家 北海道・青森・秋田 東洋書林 1998.9

注29)　飯島沙織：北海道における明治後期以降の「越中造」民家の史的研究、札幌市立大学デザイン学部卒業研究、2010.3

注30)　角幸博：道東の建築探訪、北海道新聞社、p.97、2007.5 注 29)注 27 参照

注31)　注 27 参照

注32)　角幸博：道東の建築探訪、北海道新聞社、p.111、2007.5

注33)　注 27 参照

注34)　北海道の近代和風建築‐近代和風建築総合調査報告書‐、北海道教育委員会、p.112、2007.3

注35)　注 27 参照

注36)　澤田香南子：北海道勇払郡厚真町における農家建築の建築的特徴、札幌市立大学デザイン学部卒業研究、2010.3。大多智絵：北海道勇払郡厚真町における枠の内をもつ農家建築の特徴、札幌市立大学デザイン学部卒業研究、2012.3。

注37)　日本の民家調査報告書集成　第 8 巻　中部地方の民家　富山・石川・福井、東林書房、pp. 3-4、1998. 6。

注38)　注 34 参照

注39)　富山市民俗資料館　富山市民俗民芸村　パンフレット

注40)　入道家住宅　平成 10 年 2 月 25 日　富山県指定有形文化財　富山県教育委員会。

注41)　富山市民芸合掌館　富山市民俗民芸村　パンフレット

注42)　合掌造とは、縄とネソ木（雑木の若木)で結束し、柱や梁(はり)などの結合部分の継手工法として、釘やカスガイをいっさい使わず、クサビが用いられている。合掌造りの屋根の内部は、屋根裏を 2 層から 3 層に分けている。この形態の家屋の発生は江戸時代中期頃と考えられ、養蚕と雪への対応、大家族と狭い土地等がこの形式を生み出したと考えられている。(富山市民芸合掌館　富山市民俗民芸村　パンフレット)

注43)　砺波指定文化財　旧金岡家住宅　かいにょ苑　パンフレット

注44)　永井規男・福井宇洋：吉崎御坊蓮如人記念館七不思議堂(旧根尾家住宅)、調査報告書、2011．10

注45)　富山市陶芸館　富山市民俗民芸村　パンフレット

注46)　となみ散居村ミュージアム、砺波の伝統的家屋　アズマダチ　パネル

注47)　アズマダチとは、県西部に多い屋根の造りで、切妻の妻面を前に向け、またぎの多い瓦屋根のことである。太い束と梁を格子に組み、一舛に 1～2 枚の大貫を入れ、木部は漆を塗り、壁面は白壁で仕上げる。幅の広い破風板がこれを斜めに大きく切る。大胆な造形で、またぎが大きいため、迫力がある(となみ散居村ミュージアム、砺波の伝統的家屋　アズマダチ　パネル)。

注48)　砺波指定文化財　旧金岡家住宅　かいにょ苑　パンフレット。

注49)　入道家住宅　平成 10 年 2 月 25 日　富山県指定有形文化財　富山県教育委員会　解説。

厚真町古民家再生基本計画

明治期以降の北海道勇払郡厚真町における枠の内構法の農家建築の歴史的意義
－富山県砺波地方における枠の内構法の民家遺構との比較を通して－

平成 25 年 3 月

特定非営利活動法人　北の民家の会